
月の調べと竜の巫女

水月 灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の調べと竜の巫女

【Nコード】

N2645J

【作者名】

水月 灯

【あらすじ】

ある日すっかり転んですっかり打ち所が悪くてこの世とオサラバしてしまいました。

気がつけば異世界でした。

……え、ちょ、普通異世界トリップって生きてない？なある少女の物語。

ブローグ

ただ一つ、ただ一つ。
ほしいものがあつた。

——その日は、とても月が綺麗だった。

天高くより冴え冴えと降り注ぐその光は、黄金と言うよりも銀に近く、今日の月はまた風情が違ふなど、ついつい見惚れてしまったのだ。

それが、まさか命取りになるなんて思いもせずに。

……数秒後。

いつものアルバイトの帰り道として、人気の無い道を、首が痛くなりそうな程に空ばかり見上げて歩いていた私は、足元に全く気を配っておらず、そこにあつた拳大の大きな石に蹴躓き、慌てて体勢を整えようとした所で足を滑らせて——後ろ向きにひっくり返った揚句、頭を強かにコンクリートの地面に打ち付けた。

味わつたこともない程の凄まじい衝撃がした。

——それは生き物としての本能故か、わかってしまった。

ああ、これは打ち所が悪いな、と。

まさか、そんな格好悪い死に方をするだなんて思つてもみなかったけれど、あつという間に私の意識は遠退き、慣れ親しんだ肉体とさよならすることになったのだった。

せめてアスファルトだったら、もう少し違う結果になっていたのだろうか。己の間抜けさを呪う間も無く、意識の喪失は訪れた。

——…光が見える。

——誰かの泣き声が、する。

誰……？

——それは、とても綺麗な淡い七色の光を背負った、幼い子どもだった。

子ども…？

ぱつと見でも愛らしいだろうと推測される、小さな顔を真っ赤に泣き腫らし、今にも零れ落ちそうな大きな瞳にたくさん涙を溜めて。大泣きしているように見えるのに、その泣き声は肉声としては時折しゃくりあげる程度だった。

……直後、聴こえていたのは肉声ではなく心の泣き声だと、そんなものを聴けるような特殊能力など持ち合わせていなかったのに、そんなに納得することが出来た。

声にならない「聲」は、とてもとても悲しそうな泣き声。

長い青銀の髪に紫色の瞳をした、とても可愛い子どもだというのに、何がそんなに悲しいのか、嘆き悲しむといった表現が似合うような、ぼろぼろと涙を零す様があまりにも痛ましくて、気付けば声を掛けていた。

『どうしたの？』

「……！」

突然掛けられた声に驚き、びっくり、と子どもは肩を震わせてこちらを見た。

『何がそんなに悲しいの？』

「……おじいさまが、おかくれになってしまったんだ」

随分とまあ、難しい言葉を使う子どもだった。

服装もあまり見たことがないものだが、手が込んでいることは一目でわかる仕立ての良いものだし、所謂やんごとなき家の子どものものだろうとは思ったが、相手が泣いている子どもであることに変わりはない。

思わず目線を合わせるようにして、宥めるように相槌を打っていた。この時、お祖父さんが亡くなったことを嘆くその子が、初対面の自分にすなりと回答をくれたことは通常ありえないことだったのだと、後に私は聞くことになる。

子どもは、自分にとって私がどんな存在であるのか、当初自覚はないうまに、本能的に感じ取っていたのだろうと。

『……そう、それはとても寂しくて、悲しいことだね』

「だからわたしがあとをつがなくてはならないんだ。……なのに、どうしてもひつようなものがみつからない」

すん、と子どもは鼻を噉った。

その拍子にまた、ひとつ透明な滴が転がり落ちる。

「さがしても、さがしても……みつからないんだ。みつからないってことは……つぼくじゃ、だめなんだ……！」

どうやら背伸びをして一人称を「私」にしているらしい子どもは、話している内に己の呼び名が変わってきた。

一旦は少し治まっていた嗚咽が復活する。

あまりにも悲しい咽び声が切なく思えて、思わずその温もりを抱きしめていた。

驚いたように子どもが目を見張る。

実は私も驚いた。死んだんじゃないかっただけ。

てつきり幽霊になってこんな光景を見ているのかと思っていた。

「え…？」

『よしよし、悲しかったね。辛かったね。…もつと泣いていいんだよ。あのね、一度は涙を流しつくさないと、悲しみは安定しないの。涙は心の痛みを抱きしめ和らげてくれるものなんだから、流してしまいなさい。そして、一頻り泣いたら、今度は笑って。——そうしたらきつと、幸福が近付いてくる目印になるから』

「……うそだ…」

『嘘かどうか、試してみないとわからないでしょう？』

「…そんなことで、みつかるわけない…っ」

駄々を捏ねるように子どもは頭を横に振る。

それでも、どうしてか抱擁を解いたりはずせず、寧ろしがみ付くようにしてきた。

「うそ…だ…っく、う、うああああん…！」

嘘だ嘘だと言いながらも、子どもは派手に泣きだした。

この場合、私が泣かせたのだろうが、他に誰も見ていなくてよかった。

幼子を泣かせている所なんて悪印象でしかないだろう。ただ、小さ

い子が声を殺して泣くなんて許せるはずもない。

子どもは感情を発散させることで小さな体にストレスを溜めないようにし、情緒の発達を促すのだから。

激しく泣く子どもを抱きながら、ぽんぽんとその背を叩いてあやす。見知らぬ子どもだというのに、縋るように掴んでくる小さな掌を、ひどく愛おしく感じた。

——この時の私はまだ知らなかった。そこが、見たこともない場所であることを。

プロローグ（後書き）

感想いただけると喜びます。
主人公いきなり死んですみません。

第一話 孤独を埋めるもの

子どもと関わった経験は多い方だと思う。

それでも、これほどに懷かれたのははじめてだ。

「——シュリユセル様。それは一体何ですか？」

大人との関わりも多かった方だと思う。

それでも、これほどまでに殺意を抱かれたのもまた、はじめてだった。

「それじゃない！ カズキはぼく…わたしのウィータだ！」

きらきら輝く美しい子どもがそう言った瞬間、相手の殺気が勢いを増した。

既に内心冷や汗が止まらない。

「巫女^{ウィータ}…？ そのニグリティアがですか？」

まさにゴミでも見るかのような視線、というのはこういうものなのだろう、と私は思った。

後に知ることだが、ニグリティアとは『哀れなる影』という意味らしく、肉体は死んでいながらも何故か黄泉に行けずにただぼーっと世界を漂っている何の益も害もない魂のこと、つまり日本でいう低級な浮遊霊のことを指していたそうだ。当たっているようだが失礼である。

シュリセルと言う名の子どもが、これほどまでに私に懷いている理由は、説明されてもよくわからなかった。

泣いているのをあやしていた最中、いきなり何かに驚いたようにし

て泣き止んだ子どもが、胸元から何かを引っ張り出したと思うと、その手に美しい光を放つ石を握り、呆然とした拳句、私にタツクルをかましてきたことが理解不能な自分の立場の始まりだった。子どもは、自分の髪のように綺麗な青銀に光る菱形の石をこちらに向けながら、きらきら輝く笑顔で私に言ったのだ。

そなたがわたしのさがしていたウィータだったのか、と。

ただの平凡ないち日本人の私はぽかんと口を開けるしかなかった。何のことじゃい、と。

確かに、その子どもは見たことも無いほど美しい姿形をしていたし、色彩的にもゲームのキャラクターのような、地球ではお目にかかれない感じではあった。死後の世界とも何か違うようだし。

変だなーと何となく思っではいたけれど、まさかそこが地球ではなく、ふぁんたじーな世界だとは。

その子どもの名はシュリユセル・アクアレギアスと言い、何と竜の長なのだという。

そしてこの私、サトウ カズキ佐藤千希——享年十七歳と数カ月は、シュリユセル曰く『ウィータ王の巫女』と呼ばれる存在であるらしい。

……… 全くもって、意味がわからない。

というか、これは異世界トリップなるものなのでしょうか。だとしたら私幽霊っておかしくないでしょうか。いやいやいや、死ぬぐらい経験しないと現実じゃ来れないのか？って、そんなわけあるか。

ちょ、責任者出てこい。

第一話 孤独を埋めるもの（後書き）

主人公は海に向かってバカヤローと叫びたい気分のようにです。

第二話 異世界にて

みなさんどうもこんにちは。

満月がきれーだなーと上を向いて歩いていたら打ち所が悪くて幽霊的なものになってしまった、一応元花の女子高生、佐藤千希です。

昔から月は好きだったからついつい見蕩れてたんです。月が悪いとは言わないがあんな恥ずかしい死に方はしたくなかった。どうせならなんかもつとさ……いいや、思い出すのはよそう。死にたくなってくる。多分もう死んでるけど。

昔からよく、千希ちゃんの変な所で抜けてると言われ続けてきましたが、死因までそんなことが原因とは。

もしかして、このかなり平凡すぎる名字に反して、若干気恥ずかしいご立派な名前の漢字が悪かったのか。

千の希望と書いて「カズキ」と読むなんて、御大層な名前である。嫌いではないけれど、自分にはもっととありふれた漢字のありふれた名前が似合うのではと自覚しているわけで。

昔から、見た目も成績も平々凡々な割に、読み仮名的には中性的なのに漢字は妙に綺麗だと言われるそこばかり目立ってきた。外見に似合わないと言いたいのだろう。そんなの自分がよく知っているからほっといてくれ。

——という具合に、名前が本人の実際とアンバランスであつたので、自分は妙に抜けていたのだろうか。なんて。

……はい、自分の死亡原因なんて考えても詮無いことは、現実から逃避したかったからです。

お願いですからそんなに睨まないでください。

シュリユセルは、不可思議にも半透明な私に触れることができるので、上機嫌でずっと腰の辺りにしがみついていた。話し方は妙にしつかりしているが、見た目、四歳くらいだろうか。本当に可愛い子である。どうも聞く所によると、竜はつがいとなる相手を見つけないまで無性であるそうで、シュリユセルは彼でも彼女でもないそうなのだけれど——女の子にも男の子にも見える美貌の理由がわかった——統一されていないと面倒なので、扱いとしては少年としてでいいらしい。周囲も無性のことをわかつているが、シュリユセル自身が頓着しない為に、男の子に対するような関わりをしているのだという。

そんな『彼』の様子は、まさに卵から孵った雛鳥のよう。千希の側から離れないために、シュリユセルが座る幅の広い長椅子の向こう側で、無表情の人物は険悪な雰囲気を崩さない。

シュリユセルに続き、とんでもなく美形なその人は、やや襟足の長い黒髪に紅い瞳の、二十代半ばと思しき青年で、きりつとした眉を不快そうに寄せていた。

表情はないのに涼やかな目元から憎悪にも似た色が伺える。

チキンな千希はプライドをかなぐり捨てて土下座し逃げ出したくなつただけけれど、そんなことも許されない雰囲気である。

青年は、何でもシュリユセルの『王の護り人』フレディオと呼ばれる存在であるらしく、名をエクエス・アートラムというそうだ。

わたしの一番の生まれた時から側近だ、と誇らしげにシュリユセルが紹介した時は、若干雰囲気も和らいでいたけれど、敬愛しているらしい主人がぽつと出の見知らぬ女である千希にべつたりでは、警戒は募るばかりであるらしい。

「エクエス、これをみてくれ」

そう言つてシュリユセルが懷から取り出したのは、あの青銀色の石。

「それは――」

あれ、さっきみたいに光つてない。

千希の疑問をよそに、エクエスが何か言いかけた時、シュリユセルはその石を千希へと向けた。

とたん、淡く光を放ち出す石。

その光を見た途端、エクエスはより表情を固くした。

「……『審判の石』が反応していますね」

「そうだ！ だから、カズキはわたしのウィータなんだ！」

「――神より賜りし宝珠が認めたならば、本物なのでしょう。すぐに、儀式の準備を。……ですが、シュリユセル様。『王の巫女^{ウィータ}』が生者でなかったことは、今までにありません。反発の聲が上がることは必死です……御覚悟を」

「……わかつてる。だけど、ぎしきをぶじにおえられれば、カズキがぼくのウィータであることはまちがいないだろう？」

しゅん、と落ち込んだように、けれど希望を捨てていないような目で見つめてくるシュリユセルの足元に跪いて、ふ、とエクエスは微笑んだ。

この人笑えるんだ、と見ていた千希に鋭い一瞥を投げかけ、主へと告げる。

「ええ、儀式は神の認めを受ける場ですから。成功をお祈りしております」

言外に、シュリユセル様は失敗するわけがないんだからためえ失敗

するんじゃないぞ、的なことを私に言ってますよね。
でも何が何だかわからないのですが。
儀式って何ですか。

そもそも竜とか巫女とかどうなってるの。

儀式は十日後に行われるらしい。

その間、私には行儀作法等を教える教師が付くことになった。
先生はともたおやかな美女で、まともな人に漸く会えたと喜んだ
のも束の間、授業は果てしなくスパルタでしたとき。

「この世界、フロースロスには四つの大陸が花びらのように円を描
いて散っています。中心にある海は限られた者しか通ることのでき
ない神域です。一つの大陸が一つの国。四方の国々は、この国アク
アのように、それぞれ司るものが異なっています。アクアは水、イ
グニス火、アエルは風、テッラは大地を象徴し、それぞれの国の
王である竜はその属性に縛られています。民の性質もそれぞれが奉
ずるものに近くなるようですね。世界には王の直系の血筋にしか竜
が存在しません。眷属と言われる私達は竜人という種族ではありま
すが、竜の姿を持たないので――聞いていますか？」

「はい、もちろんです…！」

「では、理解はできていますか？」

「…は、半分くらい…」

言った瞬間、凄まじい痺れが全身を襲った。

『ぬkおb s い!?!』

珍妙な悲鳴が漏れた。冷たい微笑と共に、麗しき美貌の先生は淡々と言う。

「理解しなさい。同じことは言いません。それでもあなたのために噛み砕いて説明しているのです」

魔法とやらは厄介だ、と肉体がないから体罰とかはないかなと安心していた自分が馬鹿らしくなった。

何せ、実体のないものでも攻撃を喰らうのだ。何故痛覚を感じるのか不思議でたまらない。

そんなことを口にしたらまた授業内容が増えるので今はお預けにしておく。

「竜は竜体と人形の二つの姿を持ちますが、私達竜人は人間と同じ姿しか持ちません。ですが、知力や体力、魔力などは人間とは格段に違います」

生憎この場にシュリユセルはいない。いないからこそお仕置きは厳しい。

何度目かわからないお仕置きを喰らって、千希は必死で話を聞いていた。それこそ、人生で一番真面目に。

「竜人に関することはひとまずここまでとして、肝心の『巫女^{ウィータ}』の説明に入りましょう」

端的に説明するところだった。

竜の王には何故か魂の波長が合う人間が必要である。

その半身、片割れというべき存在がいなければ、王として認められ

ない。

何しろ、その半身がいなければ神に王として認められるための儀式が行えないそうなのだ。

その半身が、『王の巫女』^{ウィータ}である、と。

この国は水の竜の国で、その王様であるシュリュセルはずっと巫女を探していたそうのだが中々見つからずに途方に暮れていた所にほいほい私が現れた、と。

……わからん。

なぜ、異世界人の自分がそんな存在なのか、全く以て理解不能である。

今まで生身の人間以外が巫女であつたことはないそうなので、先生もその理由はわからないらしい。

果たして、その謎が解ける日は来るのだろうか。

——とにかく、なんだか面倒なことになりそうだ。

第三話 世界の迷い子

「……取り敢えず、最低限の最低ぎりぎりな教養は身につきました」
「——随分と苦労したようだな」
「ええ、これほど出来の悪い人はじめて見ました」

麗しい外見の二人が交わす会話の内容は、千希について。
本人は目の前にいるのだが、容赦が無い。

……すみません、能力値低くて。御苦労おかけします。
あれ、異世界に来たら普通何かしらの特殊能力的オプションがつくものじゃありませんでしたっけ。
そういう仕様が普通では？

死んでるからアウト？
と、いうか私。やっぱり死んでるんでしょうか。打ち所悪かったな
あとは思っけれど、何だかいまいち実感がないんですが。
聞いてもわからないよねと思いつながら先生に質問してみると、意外なことにさらっと返事が返ってきた。

「あなたの肉体なら、もう存在しませんね」

あまりにもはつきり言われて、逆にどう反応していいかわからなくなつた。

この数日という短い期間の中で、私が常識も何もまるで知らないこととは彼女——ウィオラ・グラナトスには、まるつきり説明してある。事情を話した時、当初は驚いていたようだったけれど、割合すぐに頷いて、納得していたようだった。
転んで頭を打ったという件は説明するのが嫌だった。

馬鹿にされるかな、と思ったのだけれど——口には出されず、目にただ憐れむような色が浮かべられただけだった。地味に傷ついた。そしてそのことには触れず、ウィオラは言ったのだ。

つまり、あなたは界迷者かいめいしやなのですね、と。

平たく言うと異世界の迷子人をそう呼ぶそうだ。実際にはそう多くはないが、文献を紐解くと、いくつかその記述があるらしい。

まあそんなに簡単に世界を越えてくる人間がいてもおかしいだろう。前回その存在が確認されたのは、百年ほど昔のことのようだ。

故に、異世界から迷い込んだ者——界迷者の存在は、一般にはあまり知られていないそうである。

記録からすると、界迷者は異世界トリップの王道に違わず、世界を跨ぐ際に存在そのものが変化するそうで、新たな世界に順応しやすいように体質が変わるものらしい。言語を理解したり、驚くような力がついたり……。

だけれど普通、肉体がなければ人は世界を越えることはない。

肉体が朽ちた瞬間、魂は召されるものであるし、身体という鎧に護られていた魂自身が、剥き出しの状態では、世界の壁という異質なものを受け入れられるはずがないそうなのだ。

私の場合は、シュリユセルの巫女であつたからたまたま界越えが出来たのかもしれない、という推測だった。

そこまでは個人授業で聞いていたのだが、自分の生存について聞いたのは、今回が初めてだった。

肉体を置いて遠い世界へ来てしまったのだから、その身体はもう土に還っているだろう、とのことである。

——何となく諦めはついていたけれど、やっぱりショックだ。若い身空で何という死に方。

それなりに親しくしていた人達も、泣けばいいのか笑えばいいのかわからなくなっていそうである。

「——礼儀作法がどれ位身に着いたか、簡単な試験をしても？」

「……あまりあてにはなりません、どうぞ。間違えたらまたお仕置きしますから」

ぼうつと追想していたら、嫌なフラグが立っていた。

また魔法攻撃ですか。勘弁してください。

今はシュリユセルは儀式の準備と衣装合わせの最中で、ここにはいない。

死亡フラグですか。いや、死んでるらしいのだけれど。
簡単な試験ということは、習った数多くのことの何か一つについて試されるのだろう。

何が来るのかと身構えて、思わずファイティングポーズを取りそうになった。……瞬殺されそうなのでしないけど。

エクエスはウィオラの台詞に頷くと、一歩前に進み出て——千希の足元に片膝をついた。

腰に佩いていた大振りの剣を鞘から抜き取ると、その漆黒の刀身が露になる。

一瞬、そのまま斬られるのではとひやりとしたが、彼は姿勢を変えずに、剣の切っ先で天を指すように構え、刀身の一部を己の額に当てた。

これは、竜の騎士長『王の護り人』^{フレディオ}の最高位の儀礼である、とスパルタ授業で習った。

エクエスの礼はとても優雅で美しく、まるで一枚の絵画のようだった。

ぼうつと見惚れる自分を叱咤して、慌てて、私もそれに応えるように、片足を軽く引いて、胸の前で祈るように手を組んでから、その手に触れないぎりぎりの位置まで頭を下げた。

それが巫女^{ウィータ}の返礼である。

巫女というものは、イメージ通り、裾の長いひらひらした純白な衣装が正式なものであるらしいのだが、実体がないのにお着替えは無理だよねーなんて思っていた所、ドジった時の格好、ジーンズにパーカーという物凄くラフな姿の私へ、三日程であるものが届けられた。

それは質素でありつつも上品な意匠の、巫女の白き正装。すぐくふあんたじーだ。

何しろ、その服は半透明で、着せかえてくれた相手も半透明だった。半透明といっても私のように幽霊ちつくなばやけた感じではなく、きらきらと綺麗な色を纏った、いわゆる肉体のない、妖精と言われる種族のひと達だったのだ。

竜は妖精の友らしく、困っていると伝えたら手伝いに来てくれたとかなんとか。服も彼らの手作りである。

妖精さん達はさすがに人とはやや違う顔かたちをしていたけれど、綺麗なことは確かで——こちらの世界にはもしや美形しかないのではと疑いかけた。

幽霊でも着替えられるってはじめに知った。いや、私がどこかおかしいのか？

そんなこんなで、現在生まれてはじめてこんなにひらひらした服を着て、似合わない礼を取っているわけだけれど——

「……身のこなしがややぎこちない、減点」

『ちょ、まっ……!?!?』

一応合格点をもらっていたはずの礼で、まさかの落第。

抗議の声も無視されて、容赦なくウィオラ先生はお仕置きを喰らわせたとき。

いつも使われる痺れは感電させているようなもので、つまるところ

雷撃だといつ昨日知りました。
絶対実体あつたら死んでるよね。幽体なのに痛いって、本当に詐欺
だと思う。

「カズキー！」

暫くして、ぴったりとくつついてきたシュリユセルが癒してたまり
ませんでした。

この子竜というより犬っぽい。懐き具合が。

本当は私が敬わなければならぬ主なのだけれど、年の離れた弟に
しか思えない。

「ベンきょうはすすんでいるか？ ウィオラはゆうしゅうだから、
ぎしきまであとすこししかじかんがないが、まにあわせてくれると
はおもうが…」

「シュリユセル様、ご心配なく。全て恙無く進行しております。儀
式は明後日に控えておりますが、巫女様には取り敢えず一通りの教
養を身につけて頂きました」

「さすがだな！ カズキもたいへんだっただろうが、よくがんばっ
た！ ウィオラはウィータともかかわりのふかい、めがみのしとだ。
これからもいろいろとおしえてもらおうといい」

にこにこ嬉しそうにほめてくれるのは可愛いし大変嬉しいのだけ
れど、それは私にもう一度死ねること？

……無いけどさ、胃が痛いです。

第四話 夜の誓い

くつくうと、可愛らしい寝息を立てて、あどけない寝顔をさらす子どもの青銀の髪を、さらりと撫でる。

指通しの良い髪は、触っていて気持ちが良い。

妖精からもらった服は着ることができたけれど、妖精とは触れ合うことが何故かできなかった。

千希が触ることができるのは、ただ一人。

この、目の前で眠る小さな竜のみだ。

食えることも眠ることも、この身ではする必要がない——できない。巫女の部屋は竜王の隣で、その寝台に横たわって眠ろうとして、眠りという感覚が襲ってこなかったことに、衝撃を覚えたものだ。

人にとっては生きるために当然の欲求行動が、今の自分には当てはまらない。

半透明に透けている、実体が無い自分。

シュリユセルにしか触れないということは、物にすら触ることができないということだ。椅子にしろ寝台にしろ、気を抜けば透過してしまう。着ている服には触れるけれど、同じ素材で家具など求められるわけもないので、ものに触れないことは諦めるしかなかった。

部屋にいても暇だからと、こっそりシュリユセルの所に遊びに来ていたら、喜ばれてしまった。

そして一緒に眠ろうよ、と無邪気に誘ってきた彼の誘いを断られるはずもなく、母親のように添い寝をするのが日課になっている。

それを知ったエクエスはやはりこちらを睨んでいたけれど、不思議なことに、止める言葉は口にしなかった。

眠ってしまったシュリユセルを撫でることも習慣づいてしまったが、その行為によって、私は自分の存在を確かめているのかもしれない。もう既に、時は深夜だ。

この世界では十進法が適用されていて、一日は二十四時間、一時間は六十分と地球と同じで、時計もあった。電池とは違い、希少な鉱石によって時を刻むその時計は半永久的に狂わないそう、正確である。

ところで、十進法は同じでも、流星に色々な名称などは異なる。

当初は気付かなかったが、この世界の言語は当然ながら日本語とは違う。なのに言葉が理解できるのは魂が感覚的に敏感であるためと巫女という役柄のためらしい。会話において自動的に翻訳が掛かっている——という少し違う気もするが、何故か言葉が母語のように理解できるのである。こちらが話す時には自然と、日本語ではない言葉が出るのだ。……しかし、見せてもらったが、文字は読めなかった。

話し言葉限定。それだけ。またもやトリップの特典はほとんど無い模様である。話を通じるだけまだ良かったが、文字などはこれから勉強しなければならぬらしい。憂鬱だ。

所謂丑三つ時、にあたるその時刻。警備の騎士は見張りについていても、人々はおおよそが眠りにについていた。床に足をつけることさえ本来はできないはずなのに、沈まず、普通に歩く——若干浮いているようなので床を滑るともいう——ことができるのは、人は地面を歩くものだという固定観念のせいだろうか。お陰で床を抜けることはないから助かっている。そこまで気を張っていない。

幽霊は足がないと一般的に言われるが自分は普通にあるよなあと改めて自身を謎に思いながら、シリリユセルの側を離れ、するすると移動し、露台へと続く硝子の戸を通り抜けた。

触れないのだから仕方ないが、建物を通り抜けるという行為に最初は凄まじい違和感を覚えたものだ。もう慣れたが。幽体の特権と言えば特権だろうに、あまり有難くはない。

露台に立ち、空を見上げると、そこには欠けた月が見えた。

地球のものよりも遥かに大きく近く見えるその月は、美しい銀色の

光を放つものと、金色の光を放つものの二つ、双子の月だった。地球で見た周期とはややずれていて、こちらは今、月が満ちていつているところだ。

月を見る度に、ここが地球ではないことを思い出す。

星もたくさん見えた。瞬きを繰り返す幾千の星々——こんなに澄んだ綺麗な夜空は、今まで見たことがない。

自然がたくさんある、輝かしい世界。

人が汚してしまった地球とは違う美しさが、ここにはある。

「——やはり、眠れないのか」

唐突に聞こえた声に、ぎょつと振り返った。足跡も気配もまるでなかった。

シュリユセルの部屋の左右には一つずつ部屋がある。

左隣は巫女^{ウィータ}の部屋、右隣は王のつがいの部屋。

シュリユセルはまだ子どもなので、右の部屋は空き部屋だとばかり思っていたけれど、どうやら彼はそこから現れたらしい。

手すりですぐに仕切られた独立した露台、その区切りをいとも簡単に乗り越えて。

「エクエスさん……」

「王の右隣の部屋は基本的に使われることはない。つがいとなった竜は同じ部屋で生活するからな。だから、名ばかりの部屋にはいつからか護り人^{ブレディオ}が控えるようになった。いつでも王の元へ駆けつけられるように」

そういえば、シュリユセルの部屋は物凄く広いし、部屋の中にまた部屋がある。無駄に広いなと仰天していたが、そういうわけか。巫女の部屋もかなり広いが。

何も聞かずとも疑問を読み取ったらしいエクエスの答えに納得して

いると、冷たい紅の瞳が、真っ直ぐにこちらを射た。
燃え盛る炎のような、流れる血のような、美しくも戦慄を覚える、
不思議な色合いの深紅の瞳。

「……肉体を持たず、妖精とも違う存在であるお前はきっと、睡眠
すら取れないだろうと思っていた」

ニグリティアと似たようなものだからな、と漆黒の服に身を包んだ
騎士は言う。

浮遊霊と断定されなくなったのは、ひとえにウィオラのお陰だろう。
ニグリティアとは少し違うようです、と述べた彼女の言葉を、疑い
つつも彼は受け入れたのだ。未だに信用は皆無のようで、向けられ
る視線は厳しいけれど。

月光に照らされた黒髪の騎士は、気高さを増して見えた。

彼は王の剣、王の盾。シュリユセル 竜王をあらゆる災厄から護る騎士だ。ブレディオ

「——儀式の前に問う。答えろ、哀れな異界の迷える魂よ。お前に
我が王の為、逆らう者を根絶やし、疑心を持って他と関わり、絶え
ず危機に身を晒す覚悟はあるか。王の命を護るとは、そういうこと
だ」

社会の在り様が変容し、例えば表面的な建前だけのようになってしまう
っていたとしても、人の命を奪うことは許されないということが常識
とされる国で安穩と生きてきた少女に、彼は一瞬の揺らぎも許さ
ぬという眼差しで、問い掛けた。

いつのまにか、ひたり、と額に突きつけられている一本の剣。夜の
闇のようなその黒き鋼の剣は、退魔の力を持つ、肉体を持たぬ者す
ら斬り捨てる魔剣であると聞いている。

王を害するものを殺せるか。心を許した相手でも斬り捨てられるか。

例え魂が引き裂かれる危険に遭うとわかっていても、王の隣にいられるか。

「……偽りは許さん。お前が例え儀式で神に認められようと、我が主に値しないとわかれば、神の罰を受けようと、滅してみせる」
誰よりも真っ直ぐで曇りの無いその在り方は、いつそ眩しい程だった。

『私、気がつけば死んで。目の前にいきなり現れた子どもが、必死で哀しみを堪えていたのが可哀そうだったから、慰めました』

あんな嘆きをいくつも見てきた。

でも、子どもが子どもらしくない抑えた泣き方をする事なんて、許せなくて声をかけた。

はじめは、ただそれだけ。懐いてくれたことが嬉しかった。

『だけど、知らない世界で唯一、シュリユセルだけが私を必要としてくれた』

それは巫女^{ウィータ}としてであり、けれどどこかそれだけでもなく。

何にせよ、自分が何なのかすらわからない彼女に居場所をくれたのは、間違いなく、あの幼い竜だった。

王様だろうと何だろうと。

『誰かを傷付けたりとか、そういうことができるかはわかりません。でも、シュリユセルを護りたいって、そう思います』

まだ、たった数日しか一緒にいたわけじゃないのに。
無心で慕ってくるその姿に、完全に絆されていた。

人を傷つけても、その身を呈しても守るという自信はまるでないけれど。

……傍にいてあげたい。他の誰でもなく、あの子があの子だから。

「それが答えか」

『すみません。お求めになっているものとは違うと思いますけど、そうです』

はは、と頼りない笑みを浮かべる千希に、エクエスは眉間の皺を深める。

うわあ斬られるかな、と焦りながら身構えると、深い嘆息を一つ落として、エクエスは意外にも剣を仕舞った。

きよとんとした少女へ、舌打ちでもしそうな表情で吐き捨てる。

「いいだろう。せいぜいシュリユセル様の足枷にならぬように心がけることだ」

『…え、いいんですか？』

「——もとより、お前に戦力としての期待はしていない。今までの巫女^{ウィータ}は王の護衛としても活躍してきた者もいるが、大概はおとなしくしていた。……誰を裏切っても主を護ると言われた方が嘘臭い」

『はあ……』

エクエスは空を見上げた。

先ほど、千希が見ていたように、彼もまた月を眺める。

「シュリユセル様は、生まれて間もなくして御両親を亡くされている。竜は長命で屈強な種族だが、死ぬ時もある——だから、あの方はあまり親の情を知らない。先代の竜王様、シュリユセル様にとつては御祖父様にあたる方が親代わりとなっていていらっしゃったが、身罷られてからは、あの方はずっと沈んでおられた。普段は周囲に心

配をかけまいと明るく振る舞い、必死に王になるための勉強に励まれてきたが」

……こう思うのは失礼かもしれないけれど。

何の表情も浮かべていないのに、その横顔は。

月を見上げるエクエスは、どこか寂しげに見えた。

「――俺は、あの方がお生まれになった時からの側仕えだ。はつきり言つて、お前はあまり気に食わないが……シユリユセル様があんなに甘えていらつしやる所は、久しぶりに見た。そのことは感謝する。――だが、お前が主に良くないものだと思なせば即刻斬り捨てる。それを忘れるな」

それだけ言つて、エクエスは背を向ける。

ひらりと手すりを飛び越えて、向こうの部屋へと消えていく。

はじめて礼を言われたとびっくりしていると、ふと、何かが傍らに置かれていたことに気付いた。

それは、小さな短剣だった。同時に、声が降ってくる。

「貸してやる。粗末に扱うなよ」

顔を上げた時にはもう、エクエスの姿はなかった。

そう言われても、私は物質にはたぶん触れないんですが、と思いつつ手を伸ばせば。

何と、その短剣は触れることが出来た。

『さ、触れた……』

驚きながらそれを持ち上げ、じっと観察する。

綺麗な銀色のその短剣は、柄の根元に、宝石のような丸い石が埋め

込まれていた。

向こう側が透けて見える、透明な石だ。

何となく、月にその石を透かして見ると、石が紅く染まった。

『え…！？』

仰天する間もなく、石から紅い何かが飛び出てくる。

小さなその影は、目の前を通り過ぎて、何と千希の肩に乗った。

『こんばんは、お嬢さん。今日も女神の月は美しいですな』

肉声ではなく、やけに老成した人物のような声が、直接頭の中に届く。

おそろおそろ己の肩に目をやった千希が見たものは、一匹の栗鼠のような生き物だった。

ふさふさの銀色の毛に覆われたとても小さな体躯の中で、まん丸の紅い瞳がじつと見ている。先ほどの紅は、この色か。

『…だ、誰…？』

肉体を持たない今、千希は自分の声が声帯を通していないので電話の向こうのような、どこかフィルターを通した不思議な声であると理解している。

それともまた違う「声」を持って、その生き物は語りかけてきた。

『私はその魔具に住まうもの。肉体を持つ生き物とも、妖精とも違うもの。——なかに、深く考えずとも、そういうものだとして理解すればいいさ』

『はあ……』

『主の命により、そなたの世話を頼まれたのだよ』

手を出せば、その生き物は軽い動作で肩から移動する。
手のひらの上にちょこんと乗って、言った。

『眠ることができなくて暇だろう？ 老体とおしゃべりでもどうですかな？』

動物の表情などよくわからなかったけれど、その生き物は、どこか好々爺とした笑みを浮かべたような気がした。

そうして、夜が明けるまで色々な話をした。

太陽が昇ると共に、不思議な生き物は姿を消す。

再びシュリユセルの隣に移動して、ふと、気付いた。

あの人はたぶん、この子が安心して眠れるようにしてあげたかったから、私の添い寝を許したのだろうと。

——過保護だなあ。

嫌っている相手でもいいのか。

というか、この親切とも言える行為は、何の気まぐれなのだろう。

あの青年の考えが少しもわからず、不思議な気分になりながら、朝を迎えた。

第五話 継承の儀式（1）

ある時、創世の神は大切に育てていた一本の大樹と、己が涙の一滴を使って、一つの世界を創造した。

大樹にたった一つだけ咲いていた花を摘み、その四枚の花弁を涙に浮かべて、海と陸を創った。

世界の中心に置かれたその大樹の名はアビエスといい、その分け枝から、四方の大陸に命が生まれた。

アビエスが放つ淡い光が昼と太陽を生み、その大きな木陰が夜を生んだ。

そうして、神は世界の名をフロースロスと名付け、自らの娘二人に世界を見守らせることにしたのだ。

しかし、生命の生まれた世界に神があまり干渉するのは好ましくない。

そこで金と銀の双子の女神は、己の分身として双つの月を生みだし、はるか空から世界を見守ることにした。その際に、己が眷属として竜を創り、それぞれの大陸に根差した四本の樹を護らせることにしたのだった。

それが、この世界に二つの月と、五本の聖なる樹がある理由である。

—— 以上、創世神話第一章『アビエス』より抜粋。

おはよう、なんて呑気に、目を覚ましたシュリユセルに挨拶してい

たら、あっという間に妖精さん達が現れて、服を掴まれ無理やり隣室に連れて行かれた。

そうして、あれよあれよと言う間に、豪華な金と銀の系を組み合わせた細かな刺繍の施された、いつもの巫女服よりもやや目立つ白い服を着せられた。

いつも思うが、この服何で出来てるんだろう。聞いてもきつとわからないから、放っておくけど。

……こんな小綺麗な服、地味顔の私が着ても、似合わないことこの上ないと思う。まだ派手なデザインでないだけよかったが。

忙しい、どこか鬼気迫る人々の様子から、今日は儀式の日だということを思い出した。

途端、無いはずの心臓がばくばく鳴っているような気がした。失敗は許されないのである。

スパルタ教師と過保護騎士が怖くてたまらない。

けれどどんな時でも、やっぱり癒しはシュリユセルだった。

「カズキ、にあうな！」

輝いている目が素晴らしく可愛らしい。くるくると私の周りを一周して衣装を眺めている青銀の子の頭を、思わず撫でていた。

くすぐったそうにしているシュリユセルは、これまた如何にも儀礼用と言わんばかりに輝かしい、立派な服を着ている。

決してけばけばしいとかではなく、シンプルではあるのだけれど、見るからに高価そうだ。

こちらは白金を基調にした衣装だが、やはり銀と金の系で刺繍が施されている。

最初はわからなかったけれど、自分の服にもシュリユセルの服にも、ひっそりと、良く見れば木のような模様が縫い取られているような気がする。

……何か意味があるのだろうか？

『ありがとう。シュリユセルも、すごく似合ってるよ』

嬉しげに笑う子どもをまた一撫でして、ふと尋ねる。

『あれ、そういえば、シュリユセルは髪を結わないの？』

千希は妖精達に監督されて、ああしてこうして背中が届く位の長さの黒髪を片側に寄せて、光の欠片のような不思議な髪飾りをしている。

本当はもつと凝った髪型にしたかったらしいのだが、生憎不器用なために自分じゃできなかったのでそれに落ち着いた。

日本にいた時だって、おしゃれをしている子達を器用だなあとぼへつと見ていたものだ。

シュリユセルのように見栄えが良ければ、周りが腕によりをかけて飾り立てそうなものだけれど、青銀の髪は背に流されたままで、飾りもついていない。

「ああ。かみはゆわないのがしきたりなんだ」

『ふうん……』

確かに、何もしなくてもとても綺麗な髪だから、無駄に飾り立てる必要はないかもしれない。

「……………カズキ」

『ん？』

じつと、紫の瞳が見上げてくる。

なあに、と腰を屈めて視線を合わせれば、竜の子は真面目な表情で、問い掛けてきた。

「いまさらだが、ほんとうにわたしのウィータになってくれるか？
きつと、いろいろとたいへんなことがあるとおもう。でも、わたしはカズキにいつしよにいてほしい。わがままだとおもうが……た
ったひとりの、わたしのウィータになってくれ」

それはきつと、彼の懸命な願いだったのだろう。ぎゅっと握りしめた手は堅そうで、ああ、この子はこんなに幼いの、色々なことを堪えてきたのだろうと感じた。泣きそうな程に一生懸命なのに、涙が浮かぶ様子はない。

——出来ることならこの子に、泣き場所を作ってあげたいと思った。

『——いいよ。私にしてあげられることがあるかはわからないけど、シュリユセルの側にいる。巫女ウィータがどれくらい大変なのかわかんないけど、新米王様と新米巫女で、一緒に頑張ろうね』

ぱあつと明るい笑みを浮かべて、シュリユセルは千希に抱きついてきた。

それが、ある一人の少女と一人の竜王が、互いに誓いを交わした瞬間だった。

継承の儀式（2）

「——シュリユセル様、お時間です」

二人が抱き合っていると、いつの間にか近くにいたエクエスが、静かにそう告げた。

「わかった」

ひとつ頷いて、シュリユセルは素直に千希から離れた。

エクエスの服も、普段の動きやすさを重視した黒い騎士服を華やかにしたようなものに変わっている。

漆黒の上着の袖口や襟は銀糸で縁取られ、その肩では金色の房飾りが揺れており、いつもの魔剣とは別に、祭事用のものらしき光沢のある白く美しい剣が、もう一本腰に佩かれていた。

いつも以上に麗しいですねなんて軽口はまだ叩けないけれど、昨日のことがあって、前よりは怖くない気がする。

ぺこ、と頭を下げたが、じろつと一瞥されただけだった。……まあ、そうですよね。

歩き出した二人について行きながら、あ、と今更ながらに気付く。

そう言えば、儀式の場所を聞いていなかった。儀式で巫女が何をするのかという内容をみっちり扱かれただけだ。

白く美しい石の廊下を、こつこつと足音を立てて歩くシュリユセルと、どうやって歩いているのかさっぱりわからないが、無音で進むエクエス。それと、ひょこひょこ滑ってついていく千希。何だか異様な光景だ。

シュリユセルは竜の長であり、一国の主。

つまり、住んでいる所は当然ながらにお城なわけで、石造りの白いお城は内装もとても豪華だった。中世ヨーロッパの建築物のようなゲームの世界に出てくるような、千希の乏しい語彙では、とにかく立派としか言いようのないもの。

——その城が、他国の者も圧巻される程に美しい、特殊な石に魔法が織り込まれて作られた、築数千年の城だということを、彼女は知らない。

それがただの白亜の城ではなく、朝陽や夕陽を浴びて色を変えたり、天候や季節によって変わる陰影が様々な顔を見せる、それこそ値段の付けようの無いほどの価値ある荘厳な遺跡でもあり、古の魔法により害意あるあらゆるものから護るようにとの加護が掛けられている難攻不落の場所であることを。

学者がこぞつて飛びつくような城で何も知らずにのほほんと生活している千希だったが、後にそれらを知って、自分はそんなに凄い所に住んでいたのかと呆然とすることになるのだった。

残念ながら、今のところ千希は基本的に城の中でしか生活していないので、外観はあまり見たことがないし、勉強尽くしでも碌に探検出来ていない。夜にすればいいのだろうが——自慢じゃないが、一人だと迷子になる自信があるから却下。壁抜けすればいいってもんじゃないのだ。

そんな訳で城内部の位置などをほとんど把握していないが、儀式とか言うのだから教会みたいな所かな——なんて思っていたら。

城の奥へ、奥へ。

かなりの距離を歩いたのだが、千希は幽体だからわかるとして、二人が全く疲れを見せていないことに驚いた。しかも歩く速度が速いのだ。こちらが肉体だったら絶対にギブアップしているだろう。

いくつもの回廊を通り、中庭を抜け、扉を潜り——辿り着いた先には、思わず絶句する光景があった。

それは、一本の大きな樹だった。

一体どれ程の時を過ごしてきたのか、幹は日本の一般家屋ほどの太さもあり、天を貫けと言わんばかりに背が高い。

それ程大きいというのに、まだまだ若々しさが消えずに瑞々しく、生い茂る緑は、生き物に休息を与えるような優しく豊かな木陰を作っていた。

そして、その大樹は仄かに柔らかな青い光を放っている。

忘れていた何かを思い出すような、とてもとてもあたたかくて、懐かしさを感じる光だった。

さわ、と風に緑が揺れる。太陽の光が枝葉の隙間から差し込む様は息を呑む程に美しく、その全てに目が奪われた。

「きれいだろう？ このきが、めがみからしゅごをめいじられた『りゅうじゅ』のひとつ、オンディーヌだ」

それは全ての命の母の一部。

女神が竜に守護を命じた聖なる樹、『竜樹』のひとつ。
水と癒しを司る国アクアの神宝である。

『きれい……』

言葉を失くす程に美しい大樹など、はじめて見た。

現代日本の多くの人は、あまり巨大な樹を自身の目で見たことはないだろう。

千希も例外ではなく、命を生み出す母なる樹の神秘的な美しさに陶醉してしまった。

『こんなに大きな樹があつたの、知らなかった…』

「この樹を隠すように城が建てられ、その外側に高い城壁が巡らされているからな。城の敷地内全てに隠匿と加護の魔法が掛けられているために、この樹は外からは見ることが出来ず、然るべき道を進まなければ迷い続けるようになっていた」

加えて、二重、三重の仕掛けがあるとか。

妙な道を通ってきたと思えば、そういう理由なのか。一人じゃ絶対に来れない。

淡々と答えたエクエスの言葉に感嘆した。

徐々に樹に近づくにつれ、その大きさに改めて驚く。倒れてきたら一瞬でお陀仏できる大きさだ。今の私にはもう関係ないが。

樹の側には、豊かな水が湛えられた小さな泉のようなものが点在しており、樹の根元に水が流れるようになっている。

普通、あんなに絶えず水に触れていたら根腐れしてしまいそうなものだけけど、流石ファンタジー世界。あの樹は水の属性を持つそうで、逆にああして水に触れていなければならぬらしい。

水と樹と太陽の光の調和により、幻想的な光景が生まれていた。

ふと、樹の前に人影があることに漸く気付く。

そう言えば、儀式にはその進行を取り行う人物がいると聞いていた。女神の使徒がどうかと——ん？

あれ、何だかシュリユセルからその単語を別のことでつい先日聞いたような。

「迷子にならずに辿り着けたようですね」

「当たり前だ、ついて来れなければ置き去りにしている」

ウィオラ先生、そこで何してるんですか？……何て、聞くまでもないことですよね。

どうやら私は、実際の儀式でお世話になる使徒様を相手に、本番の練習を行ってきたようです。

ただの練習どころか、リハーサルを繰り返してたんですね。

継承の儀式（3）

「……儀式の前に、資格を満たしているか確認を致します。シュリユセル様、カズキ様。手を繋ぎ、此处へ」

ウィオラが身に纏っているのは、白を基調としていながらも、裾に近づくにつれて徐々に薄い蒼に染められた聖職衣。双つの月と四枚の花弁が組み合わされたような緻密な紋様が入った長衣の下には、ワンピース型の礼装を着ているようだった。

きちんと結われた金色の髪に、宝石のような淡い碧色の瞳の美女には良く似合う。

眼福眼福、何て思っていた所でそう言われたので、一拍遅れて、慌ててシュリユセルが差し出してきた手を掴む。

緊張しているのか、幼子はいつよりも強くきゅ、と握りしめてきた。

一步一步、ゆっくりとシュリユセルは大樹の幹に近づいていく。彼がこんなに強張った顔をしているのを、はじめて見た。

とん、と最後の一步。幹を目前にした位置で立ち止まったシュリユセルは、目に見えて力が入っていた身体を弛緩させ、ほっと息を吐いた。

……特に何もなかったけれど、何にそれ程緊張していたのだろうか？

「竜樹に近づくことが出来たということは、カズキ様が巫女^{ウィータ}としての資格を有しているということ。女神の使徒ウィオラ・グラナトスの権限にて、これより継承の儀を開始致します」

凜とした声音がそう告げた瞬間、竜樹の光が僅かに輝きを増した。ウィオラは手にしていた白く小さな杖のようなものを掲げる。

杖の先には、金と銀の鈴がついていた。
しゃらん、と鈴が鳴る。
繋いだ手に、熱が走った。

『……………あつつ…！？』
「……………っ…」

まるで、熱した板でも押しつけられているかのようなだった。
火傷した時にも似た感覚が、シュリユセルと繋いだ右手へ断続的に襲いかかってくる。

あまりの熱さに千希は思わず悲鳴を上げたが、シュリユセルは声を飲み込んでいた。決して声をもらすまいというように、強く、唇を噛み締めて。

——自分も我慢しなければと思ったけれど、それは想像以上の苦行だった。

肉体を失くして尚、痛みを感じる。その感覚にはもう大分慣れたつもりだったが、その痛みと熱は、普段のペナルティの比ではなかった。

痛さのあまり離し掛けた手を、シュリユセルがぎゅっと握る。
苦しみを堪えながら、その紫の瞳は強い光を宿していた。

ああ、そうだ。

何があってもその手を離してはいけないと聞いていたではないか。

スパルタ授業で言われたことを思い出して、手を握り直した。
いくらチキンだろうとへたれだろうと、ここは根性を見せる所だ。
熱さは徐々に増していき、けれど痛み感覚が麻痺することもなく。
ただただ、シュリユセルの手を離さないことに専念していた。
それが、どれ位の時間だったのかはわからない。
けれど想像を絶する程の苦痛が、ある時ふっと和らいだ。

「——聖印継承の儀、終了致します」

気付けば二人して地面にへたり込んでいた。

握っていた手はどんな力を込めていたのか真つ赤で——当然ながら私の手は血が通っていないので変わっていない——決して離さなかったその手の甲に、うつすらと何かが浮かび上がっていた。

それは、ウィオラの服にあった紋様とよく似ているが、色違いの青銀の印。

数秒ですうつと消えてしまったが、互いの手の甲にそれが浮かんできたのを、確かに見た。

「第一の儀を終えました。午後より第二の儀に移ります」

儀式は丸一日続くとのこと。

取り敢えず、この疲労感をどうにかせねば。

よろよろと竜樹から離れると、控えていたエクエスが近づいてきた。

「シユリユセル様、失礼致します」

一言そう言つて、彼は軽々と青銀の子どもを抱きあげる。

まるで物語の騎士とお姫様のようだ、と思った。あながち間違つてはいないのだし。

シユリユセルは将来、性別がどちらになるのだろう。

あれだけ綺麗だとどちらになっても惜しい気がする。

目の保養になる光景をぼへつと見ていたら、ウィオラの冷たい声が聞こえてきた。

「——置いていきますよ」

気付けば、三人は大分離れた位置にいる。

まずい、置いていかれたら控えの間の位置もわからないし、ここにまた戻ってくる自信も皆無だ。

『ま、待つてください！！』

大人二人の移動スピードは異常に速く、疲れた様子のシュリユセルが「カズキをまってやれ」と言うまで、千希は危つく迷子になるという危機を何度も経験したのであった。

仄かに柔らかい卵色の壁に囲まれた控えの間は、落ち着いた雰囲気
の部屋だった。

ちょっとした休憩室のようなものらしいが、その説明を聞いた時、
高校の一教室よりも遥かに広いことにどう突っ込んでいいのか千希
は迷った。

自分の基準がここには当てはまらないことはわかっているけれど。
皮張りの寝椅子には、いくつもの柔らかそうな布や枕が敷かれてお
り、シュリユセルの小さな体はそこにしっかりと受け止められていた。
余程肉体的に疲労したのだろう、今、彼はぐっすり眠っている。

「普通ならばもっと肉体が成熟してから受ける儀式だ。シュリユセ
ル様のお身体にはまだ負担が大きいのだろう」

「王には巫女の倍以上の負荷が掛かりますからね」

やや心配げに主を見守るエクエスの後、ウィオラがさりと云った
言葉に衝撃を覚える。

『そんな…！ シュリユセルはまだこんなに小さいのに…』

「子どもだろうと何だろうと、竜は竜。手加減などされません。シュリユセル様は十年の間、己の力を高めていらっしやいました。ともすればあなたの今の台詞は侮辱となります、気をつけなさい」

侮るな、ということか。

そういうつもりはなかったのだけれど、竜という種族には年齢に係なく特別な矜持があるのだろう。

はい、と頷いて——聞き捨てならないことを聞いたことに気付いた。

『……………じゅうねん？』

「…ああ、言っていましたでしたか。竜は人と比べて長寿です。人の子の成長に換算すると、十年で一歳年を取ります。ある程度成長すると姿はあまり変わらなくなりますが、今まで記録されている最高齢は二千三百七十五歳でした」

ちなみに、シュリユセル様は御年四十三歳であらせられます。

儀式より何より、シュリユセルの実年齢が自分より遥かに年上だったことに驚愕致しました。

暫く千希はシヨックのあまり固まってしまい、二人には放っておかれたとか。

継承の儀式(3) (後書き)

衝撃の事実？

最近お気に入り登録が増えてとても嬉しいです。ありがとうございます。

継承の儀式（４）

あの後、我に返った千希は、じゃあ二人はいくつなのだと思うず訊いてしまい、エクエスは片眉を上げつつも平然と答えてくれたけれど、ウィオラには、トラウマになりそうな凄絶な笑顔を向けられた。女性に年を尋ねるのはマナー違反でしたね。すみません忘れてました。お願いですから許してください。

……土下座までした彼女だったが、生憎ここは異世界。その謝り方がプライドをかなぐり捨てているのだということは十分に伝わらず、疲れていた魂に、いつもよりも威力を増した雷撃が下されたとか。

年の取り方、成長の速度が違うだけで、シュリユセルは人間に換算すると四歳だという。まあ見た目通りだ。自分にとっての一年が、竜にとっては十年かかるのだと思えば、シュリユセルは確かに幼い子どもなのだ。

扱いは今までと変わらなくてよいのだろう。

ちなみに、竜人は、幼い頃は人と同じように年を取るが、十代の少年期になると成長が四年に一度と緩やかになり、外見が青年期程になると見た目がほぼ変わらなくなるらしい。若い時期が長いのだ。平均寿命はおよそ五百歳であるとか。

エクエスは六十九歳、人と同じように考えると二十四、五歳で、つい一年程前に成長が止まったばかりらしい。竜人でもまだまだ若い方ですね、何て淡々と言ったウィオラが一体いくつなのか大変気になる所だが、気にしてはいけないことだ。

……後に知ったことだが、女神の使徒と呼ばれる司祭はまた更に、一般の竜人より長命だとか——ウィオラの年齢は永遠の謎となった。

普段ならば昼食を摂る時間なのだけれど、儀式の間は軽いもので済ませるらしい。いつも卓上一杯の美味しそうな食事を旺盛な食欲で食べているシュリユセルの前に置かれたのは、花の蜜と山羊の乳を使った涼菓——アイスクリームみたいなものだ——と、ふわふわの白いパン。

どうやら彼の好物らしい。

食えることができないと食欲もわかないみたいだ。胃もないことだし、シュリユセルがそれらを頬張る姿を千希はじっと見ているのが楽しかった。

エクエスとウイオラは食事を摂らないそうで、片隅で茶を啜っている。

「……カズキ様。今後の予定は覚えていますか？」

様付けで呼ばれるのは何だか変な気分だが、最初に抗議した時にはつさりと一刀両断されたのでそのままだ。ただ、ウイオラの口調は慇懃無礼というか何というか、丁寧だけれど丁寧ではないので、妙な感じが否めない。

まあ、それが「先生」という感じなのだけれど。

『えっと、午後の儀式はたしか、王位を拝命するって……』

「そう、先程継承なさった聖印に、女神より冠を賜る儀式です。——戴冠式とも言いますね」

『戴冠式！？』

「この国を統べる者達が会する前での儀式です。…何のために礼儀作法を教えたと思っているのですか」

『だ、だって先生一言もそんなこと……！』

「はじめから言っていたら緊張でもっと覚えが悪くなっていそうでしたからね。緊張というものは本番を前にしてのみでいいのです。特にあなたのような人の場合は」

少人数で非公開的に行われるものだとはかり思っていたのに——そんな感じのことをほのめかされていた——蓋を開ければ王侯貴族が一堂に会するそうです。

何で一介の元女子高生がこんなことになっているのかわからない。しかも現在は幽霊である。

逃げられはしないとわかっているのだけれど、ひたすら逃げ出したくなった。

当初思い描いていたように、そこは静謐な雰囲気、の漂う荘厳な教会であつた。

真っ白な壁には幾何学的な模様が薄い青で刻まれており、重厚な扉が開かれた先には、淡い青の世界。

左右の窓は青いステンドグラスのようなもので出来ており、光が射し込むと教会内部を青く照らす。また、天窓はなんの変哲もない透明な硝子のようなだったが、そこから降り注ぐ光は、左右の光よりも美しい、煌めきのある蒼であつた。

あれは竜樹くオンディーヌの光だと、何故か自然と理解した。

あの何よりも美しい光を見間違ふはずがない。

この国は水と癒しの竜樹を奉ずる国、アクア。あちらこちらで青が見られるのは、それがこの国の特徴を表しているからだ。

同じように、火と高潔の国イグニス、赤、風と息吹の国アエルは緑、大地と温もりの国テッラは金を国色としているのだそうだ。

教会の中には既に、多くの参列客がいた。

外見だけではあまりわからないが、人間と竜人が入り乱れているのだろう。

年齢も性別も様々な人々が皆、開かれた扉を——千希達を振り返つ

た。

思わず怯む千希の手を握りしめる、小さな手。

視線を落とせば、にこりとシュリユセルが可愛らしい笑みを浮かべていた。

大分体力が回復したらしい彼はしつかりと地につけている。

温度すらわからなくなった手なのに、その小さな手はあたたかいような気がした。彼女がやや落ち着いていたのがわかったのだろう。

一瞬にして笑みを消し、青銀の君は『王』の表情を見せた。

ぴんと伸ばした背中、凜と気高い真摯な横顔。

それは千希がはじめて見た、アクアの王シュリユセルの、普段の幼さを感じさせない、威厳ある姿だった。

はじめて逢った時のように、彼は七色の光を背負っていた。

この光は普通、見えないらしい。

千希が、何かの拍子に時々見えるシュリユセルの七色の光に疑問を抱いてウィオラに問い掛けた所、それは巫女だけに見える王の気質を表したオーラだと返された。何色に見えましたか、と聞かれたが、何色かと考えても、何故かただ「七色だ」ということしかわからない。素直にそう告げた千希に頷いて、ウィオラは言ったものだ。

色彩が多く見えた王ほど、賢君たる資質を持っている傾向が高いので、喜ばしいことです、と。

そういえば、王様っぽいことをしている時に、この光は見えているかもしれない。執務の時とか。

そして、最初に聞こえた悲痛な「聲」。あれは、とても強い感情だった。どうやら巫女と王は強い感情ならば互いに読み取ることが出来るそうなので、先程の自分の怯みも、シュリユセルに伝わる程に強いものだったのだろう。

今、彼からは強い緊張が伝わってくるけれど、同時にとてもあたたかな何かも伝わってきた。

さて、私も頑張らねば。

「——シュリユセル・アクアレギアス様、ならびに『王の巫女^{ウィータ}』様が御越しになりました」

こちらを隠すかのように前に立って先導していたエクエスが、優雅に一礼してそう言うと、前から退いた。

途端に先程よりも突き刺さる視線の数々。痛い痛い。

生身じゃなくてよかった、とほっとした。間違いなくぶっ倒れていた自信だけはあるのだ。

継承の儀式(5)

――あれが新たなウィータだと…？

――なんと、ニグリティアではないか

静まり却っていたはずの空間に、さわさわと密やかに囁き合う声が
広まっていく。

堂々と歩いていくシュリユセルの隣を歩きながら、自分が騒がれて
いるのだとわかり、何とも言えない思いがした。
すれ違いざまに聞こえた、声。

――おぞましい

まあそうだよなあ、と思った。自分だって生きている時に幽霊に遭
遇していたら怖いとか気持ち悪いとか思ったかもしれない。ただ、
一応見た目はグロテスクではないつもりなので、若干その感想には
へこんだ。

この世界に来て接していた三人が一般人とは違う反応だったので、
気がつかなかったのだ。

幽霊が王様の隣にいたら、取り憑かれていると思われるもおかしく
ないし、今はまだ知られていないけれど、自分の世界のものではな
いとわかれば、気味が悪いと思われるだろう。

言うなれば地球の公の場にエイリアンが現れたようなもの。異端で
あることに違いはない。

内心で苦笑していると、繋いだ手から、凄まじい感情が飛んできた。
驚いて目をやれば、シュリユセルは表情すら変えていないものの、
その瞳に穏やかでない色を浮かべている。……それは、怒りだった。

シュリユセルの周りの雰囲気が一気に威圧的になったのを感じてか、徐々に囁き声は鎮まっていた。そこへ、全ての囁きを止める声が響き渡る。

「——静粛に」

祭壇の上部には、あの双つの月と一本の大樹を司る紋様が描かれている。

その下で、先程よりも更に近寄りがたい雰囲気を持ったウィオラが、杖を片手に立っていた。教会という場所に佇む彼女は、どこか神々しさを感じる。

彼女が鶴の一声を発したのは、丁度、あと数歩で銀と銀に縁どられた青い絨毯が敷かれていた長い道を歩き終える所だった。残りはあつという間に埋まる。

冷たく美しい声が、儀式の始まりを告げた。

「これより、第二の儀を執り行う」

何だか結婚式みたいだ、なんて思った私は緊張感に欠けるのだろうか。

いや、かなりがっちがちである。

蒼く輝く竜樹の光に包まれていると、シュリユセルも昂った感情が落ち着いたようだった。

すぐ側にはいつの間にかエクエスも控えているし、目の前にいる人はウィオラだ。うん、さっきと何も変わりはない。

「——此処より遙か天上におわします双月ふたつきの神々よ、聖なる証を継ぎしこの者達に、汝らが加護を与つることを乞い願う」

右手に温もりを感じる。ちらつと見下ろせば、あの青銀の印が再び

浮かんでいた。

それは鮮やかに煌めく。

シュリユセルが手を持ち上げたので、そのまま上にあげてウィオラに差し出すように掲げた。

輝きを増した聖印に、幾人もの息を飲む音がしたようだった。

「我は汝らが使徒、眷属の遺志を継ぎし者。この地の竜樹を守護する者。遍く精霊の祝福の下、王の証を継承させん」

二度、三度。

澄んだ鈴の音が、空間を支配した。

「応え給え、金と銀の双女神よ。——蒼き慈しみを司る者に、誓約の光を」

きらりと何かが光った。

見上げた天窓から、ひらひらと何かが降ってくる。

それは輝く金と銀の光の塊で、誰もが呼吸を忘れる程に美しい贈り物だった。

ゆつくりと舞い落ちるその光は、真っ直ぐに千希と重ねたシュリユセルの手に触れた瞬間、弾けるようにして消えた。

あの聖印の上に重なるようにして、金と銀の二重の冠が載っている——そう思った瞬間、シュリユセルが群衆の方を向いて、その証を見せつけた。

「我が親愛なる民達よ、王の座は継承された」

それは、いつもの口調よりも固い、舌足らずな所など少しもない声だった。

話し方があまり完成していないことで、少し彼が拗ねていたことを

知っている千希は驚く。

一体何度、彼はこの短い宣誓を練習してきたのだろうか。

「此処に誓おう。我が蒼の血筋に恥じぬよう、賢君たる治世を行うことを」

可愛いとばかり思っていた青銀の王が、はじめて格好良く見えた瞬間だった。

参列していた人々は、わあっと歓声を上げる。

徐に、シュリユセルは手を離れた。

ん？ と首を傾げる千希の隣で、ウイオラから何かを受け取ったかと思うと、長く美しい青銀の髪を掴んで――ぱっさりと、切った。

手にしていた銀の短剣で。

あの、綺麗な髪を。

……切った。

千希は、思考が真っ白になった。

群衆の歓声が更に大きくなり、まだまだ嫌な視線の多い中をシュリユセルと共に退場したことも、いつの間にかウイオラとエクエスと共に控えの間に戻っていたことにも気付かなかった。

「か、カズキ…？」

それは何度目の問い掛けだったのだろう。

誰かが整えたのか、すっかり肩よりも短くなってしまった青銀の髪の子が、心配そうに顔を覗き込んでいたことに、安心していた千希は漸く気がついた。

『シュリユセル……』

「！ きがついたのか、いすにからだがうまって——」

意識していなかったために、椅子をすり抜けた状態のままでいた千希にそれを教えようとしていたシュリユセルは、言葉を途中で遮られ、物凄い勢いで両肩を掴まれた。

『髪がつ！ 私が大好きな綺麗なシュリユセルの髪が——！』

「カズキ、おちつ——」

『あんなに綺麗な髪だったのに、なくなっ、なくなっちゃった——！！』

今まで見たことが無いほどに取り乱した様子の千希が、半泣きでがくんがくんと身体を揺さぶってくる。

流石に気分が悪くなりそうだとシュリユセルが目を白黒させていた所、突如としてぴしゃーんと稲妻が迸った。

「落ち着きなさい、見苦しい」

冷やかな声と一瞥をくれたのは麗しき美貌の女神の使徒様。

もはや定番となりつつある雷撃に、千希は沈没した。

体罰はんたい。切実に。

でも何て言うか、電気ショックみたいなものと最近思う。痛いけど、まだマシというか……。

結局、短くなってしまったシリユセルの髪はその後に必要なだったということを知るのはただけれど、せつかく綺麗な髪だったのに、と勿体無く思うのです。

ちなみにシリユセルは、きつちりと雷撃が落ちる前にエクエスの手によって救出されており、大丈夫か、と心配そうに問いかけてきてくれました。

継承の儀式(5)(後書き)

次で第五話は終わる予定です…予想以上に長くなってしまった…。

継承の儀式（6）

空には、輝く真円の双つの月。

その金の光と銀の光は、優美でとても美しい。数日前に目にした時は欠けていたので、満月だと一層輝かしく見えた。

僅かに距離を置いて並ぶ月は大きくて、圧巻だ。

『……やっぱり綺麗だなあ……』

「カズキはつきがすきなのか？」

控えの間の窓から月を眺めていると、ひょっこり隣に顔を出したシリユセルがそう訪ねてきた。

さらりと揺れる短い青銀の髪が切なく見えたけれど……気にしない気にしない。

『うん、すごく好き』

何しろ死因が月を見ていて足元をおろそかにしていたからだ。

「そうか！ つきがすきなのはいいことだ、めがみのおわしますところだからな」

『……女神がいるところ……？』

「まだウィオラからきいてないか？ あふたつのつきは、このせかいをみまもっているふたごのめがみのけしなんだ」

女神の化身——。

なるほど、確かにそう言われる程美しいかもしれない。

ああ、だから、あの小さな獣は月を『女神の月』と呼んでいたのか。

「つきがすきなら、きつとめがみもカズキをきにかけてくださる」

『うーん…気に入ってもらえたら嬉しいけど…』

どうなんだろう。

そもそも、神様なんて遠すぎる。

「…お二方、もうすぐ定刻となりますので、移動を」

疲れた様子など全く見せずに、楚々と歩き出すウィオラの後を慌ててついていく。

相変わらず、三人とも移動が速すぎるので、こっちは浮いているようなもののなに、ついていくのが精一杯だ。

行きは二度目、帰りを合わせると三度目の通路であるのに、やっぱり道を少しも覚えられない。

似たような造りの道が多いのに、どうして彼らは一度も迷わずに進めるのだろっ。

必死で後を追った先で、再び辿り着いた、開けたその場所は、昼とはまた違った幻想空間が広がっていた。

空の月に照らされて、竜樹は一層美しく見える。

どうしてか、どちらかがどちらかの光に染められることもなく、双月は金と銀の光で優しく大地を照らしており、大樹は穏やかな蒼い光を放っていた。

そして、竜樹の周りには、小さな色とりどりの光が舞うようにして飛んでいた。

まるで、蛍のような光。

『あの光は…？』

「——見えるのか」

やや驚いたように目を見張ったエクエスに、こっちが驚いた。シリユセルに対しては表情を崩すことがあっても、こちらに向けていつもの無表情を大きく変化させているところなどはじめて見た。

『え、見えます、けど…』

見えたら何かまずいのか。
だって、あんなにたくさん、光が乱舞しているのに。

「あの光は普通、人間には見えません。巫女^{ウィータ}であっても同じこと。
……ああ、あなたは肉体ではないから見えるのかもしれないね」

千希自身が幽体で、超常現象のようなものだからと言いたいのか。
そういえば規格外だった、みたいな眼差しはやめていただけませんか。
でしょうか。

「カズキ、あれはマナだ」

にこ、と微笑みながらシリユセルが言った。
マナ？ と呟いた千希に、的確な答えを先生が返す。

「マナは万物の根源、生命の源です。この世界に属するものはマナがなくては存在できません。例えば生命活動が維持できても、マナが枯渇すれば自我をうまく保てなくなります。今は目に見えています。マナに本来実体はありません。あの光は、女神の御力が高まる今宵のような日にのみ見られる現象です。……また後に詳しく教えることが増えましたね」

お、お手柔らかにお願いします……。

つまり、マナとは生きていく上に必要な物質だと。
かたちを持たないもの、か。

……ん？

「そういえば、あなたのその服は、妖精族の秘儀を以てマナを結晶化し、月の光や朝露の雫といった様々なものを織り込んだもので出ています。詳しくは私も伝えられてはいませんが、この世に二つとないとても高価なものです。大事になさい」

やっぱりですか。

服の詳しい原材料はわからなくても、ファンタジー世界でそんな力が存在するとなればもう、何が起こっても不思議じゃないですね。何かのロールプレイングゲームみたいだ、とつい思ってしまった。

月はもう南中するかという位置にあった。

東から昇って西に沈む軌道は地球と同じだなあ、なんて思いながら、半日前のように、シュリユセルと手を繋いで、蒼の竜樹に近づく。今度は、幹の側ではなく、木陰に入ったかと思う位置で止まった。シュリユセルが空を仰ぐようにして見るので、つられて目を天に向ける。

……生まれて初めて、実際に見た。テレビを通してなら見たことがあったけれど、実物は、それよりもはるかに心を打った。

月が、蝕に入っていた。

——月食だ。

金の月が黒い影に覆われていく。少しずつ、少しずつ、金色が黒に蝕まれていった。

昔の地球では、大抵、日食や月食は不吉だと思われていたという。もしや、ここでも凶兆だと扱われているのではないかとおそろるおそろる見遣れば、三人はただじっと、月に見惚れていた。

杞憂だったことにほっとすると同時に、しみじみとした感動が遅れて襲ってくる。

黒く塗りつぶされていく月は、やがて完全に隠れてしまった。皆既月食である。

この所、地球の好事家達がこぞって観察したがるような光景を割とあっさり目にしている気がする——そんなことを思いながら、言葉も忘れて見入っていた。時間の感覚が無くなるほどにひたすらに、空を見つめ続ける。

すると、徐々に金の月が再び見え出してきた。

もう一つ月があるということは、もしや今度は銀の月が蝕に入るのだろうか、と考えたその時。

まだ金の月から影が消えぬままに、銀の月が浸食された。

双つの月を、同じ大きさの影が隠している。間にもう一つ黒い円が見えるような——見ようによつては、ちょうど三つの円が重なりあったような形だった。

うわあ、と感嘆のため息をつきかけた千希の手が、ぐいっと引かれる。

シユリユセルがすまなそうに首を横に振り、次いで、竜樹の方を向くように促した。

残念に思いながら向き直った彼女が見たのは、まさに魂を揺さぶる程に美しい、蒼だった。

『！？』

半透明の自分とは違い、それはまさに透明な蒼の光。

人の形をしたその光は、一瞬妖精かと思ったけれども、すぐに違うことに気づいた。

硝子の彫刻のような透明な蒼のひとの顔は、どこかシュリユセルに似た、けれども遥かに大人びた美しさを持つ。

シュリユセルが、繋いだ手を持ち上げたかと思えば、蒼い手がそれを取るように伸びてきて、シュリユセルの手の甲に、口づけが一つ落とされた。

実際には触れることができないらしく、感覚はなかったが、口づけるその動作によって、辺りを包み込むような光が弾けた。

『ひゃ…っ』

眩しさのあまり目を逸らす。

暫くして光を感じなくなり、視線を戻せば、もうあの蒼いひとはいなかった。

『あ、あれ…？』

マナの光も、見えない。

ただただ静寂に包まれたそこには、蒼を冠する聖なる樹が佇むだけ。

「——無事に、儀式を終えられたようですね」

ウィオラが近づいてきて、目の前で膝を折り頭を垂れた。

少し離れた場所で、エクエスも同じ姿勢を取っている。

「無事に王位継承の儀式を終えられましたことをお祝い申し上げます——新たな我が王、我が巫女^{ウィータ}よ」

「ああ、せわになったな、ウィオラ、エクエス」

嬉しげに微笑むシュリユセルの横で、千希は一体何が何だったのかと呆然とした。

もう既に、月食は終わっている。銀の月の皆既月食は結局、見るこ
とができなかった。

後に聞いたところ、双つの月が同じ大きさの蝕に入った時に出来る
円を『第三の月』と呼ぶらしいのだが、王の儀式において、それが
できた時にだけ、あの蒼いひとが現れるらしい。

あれはマナの結晶でもあり、竜樹に宿る聖なる魂なのだという。

つまりは名前で呼ぶなら、あの蒼い光のひとつこそが、オンディーヌ
なのだ。

王になるためには、第一に聖印を受け継ぐこと、第二に聖印に冠を
戴くこと……最後に、竜樹の精霊に祝福を授かることが必要なのだ
そうだ。

色々と事前に教わってはいたものの、儀式の全容はほとんど知らさ
れていなかったことは、間違いなくウィオラが千希を驚かせたかつ
たからではないかと疑ったが、何でもそれがしきたりなのだという
ちなみに、シュリユセルが切った髪は、祝福の代価としてオンディ
ーヌに捧げられたそうである。

長い髪にはマナが宿りやすいために、こうして得た祝福の代わりに
差し出した、ということ。

……そうした説明を全て聞いたのは、実は翌日のことで。

儀式が終わったと聞いた時からずっと、またもや千希は茫然自失の
状態が続いており、気付いた時には、王の部屋にいて、ぐっすりと
眠ったシュリユセルの隣で浮いていたのだ。

——空は既に白み始めていた。

わけがわからないと混乱した千希の数々の疑問に答えが返されるの

は、それからあと数時間を要したのである。

こうして、晴れて本物の巫女^{ウィータ}だと認められた千希が始終仰天している間に、儀式は終わってしまったのだった。

継承の儀式（6）（後書き）

第五話終わりました。次の更新は少し間があくかもしれません。

第六話 竜と魔法（1）

気がついたら儀式の全過程を終えていて、元の服に着替えさせられていて、もう朝でした。

……じっくりと昨日の出来事を思い返して、起きた出来事が自分の許容量を超えてしまったのだな、と妙な納得。

あれだけ普通は味わえない体験を一度にしてしまえば、頭がパンクしてしまってもおかしくないと思う。

「カズキ、きょうはわたしのれんしゅうにつきあってくれるか？」

朝食を終えてご機嫌のシュリユセルがそう言い、千希は首を傾げた。昨日は色々あって疲れているかと思いきや、ぴんぴんしている。

そういえば竜や竜人は頑丈だと言っていたな、と思いだした。

「…………練習？」

ああ、とうきうきしているシュリユセルの様子がとても可愛くて、何だか知らないけどいいよ、と返事を返した。にっこり笑顔が見られたのだから、頷いて良かった。

それから午前中ずっと、シュリユセルはどこかそわそわしながら執務をこなしていた。

王様、というのは伊達ではない。

先代の竜王であるシュリユセルの祖父が亡くなってから十年、唯一の直系の彼は、巫女すらいなかったが、立場としては王と呼んでよかったのだ。

この国の頂点は確かにシュリユセル——竜だが、日本で言う都道府県のように、いくつかの村や町といった地域があり、それぞれの領土を纏めて統括している領主がいる。

アクアの土地は割と広く、人口もそこそこ多いらしい。

国を治めるには法が、政策が必要だということはわかるが、千希は政治経済はさっぱりであるため、ウィオラに簡単に説明を受けてもあまり理解できていないために、その辺りは省くとして。

領主はいわゆる貴族という部類に入るそうだが、人間と竜人が入り混じっているそうである。

実力主義とか何とか——例えば親が領主でも、その子どもは才能がなければ次の領主にはなれない。その為に領主の子どもは幼いころからきつちりとした帝王学を学ぶが、一代で途絶えてしまう家系も多いそうだ。

今年の生産高だとか税だとか自然災害に備えての備蓄の量に堤防設備の検討だとか……、上に立つ人は忙しい。

その忙しい人達の頂点に立つのがシュリユセルな訳で——当然、彼は多忙だった。書類整理だけでもかなりの量なのだ。

内容を聞いても千希にはちんぷんかんぷん、お手伝いできることはない。

書類の束と睨めっこしているシュリユセル、その傍らで、積み上げられた紙の束を分類し、凄まじい速度で決済を済ませていく秘書的役割もこなすらしいエクエスの二人を見ながら、シュリユセルの部屋の片隅で、千希は再びスパルタ授業を受けていた。

いつもは別部屋なのだが、こちらの方が進みが早いでしょうと言わ

れたのだ。

どういう意味かと思いきや、何のことはない。

シュリユセルの一生懸命な様子を見ていたら頑張らねばと思うのと、ワイオラのお仕置きが続けば慰めてくれるので、効率が良かったのである。

飴と鞭か、とエクエスが呟いていた気がする。

実に単純だが、確かに能率はあがっているかもしれない。

今日は、魔法についての授業だった。

ワイオラが簡単に使って見せる魔法は、彼女が竜人であり、女神の使徒と呼ばれる司祭だからこそ容易に使えるものであるそうで、一般的には魔法を使えない人間の方が多いそうだ。

剣と魔法のファンタジー世界でも、魔法使いの存在は貴重なのだ。

この世界で魔法と呼ばれるその力は、自分の中にあるマナ——いわゆる魔力と言われるそれ——と、自然に溢れるマナを組み合わせ引き起こす現象。

たまに魔力持ちと呼ばれる特異な存在もいるが、基本的にほとんど人間は魔力を持たずに生まれてくるらしい。竜人にも魔力がない者はいらそうだが、量はまちまちにしろ大半は魔力を持っているとか人口で見れば、人間に対して竜人は一割程度しか存在しないが、身体能力や魔法などに優れた彼らは主に竜王の護衛や側近として仕えている。

人より優れている存在であるならば、身分的に上位を占めてしまっているかと思えばそうではなく、人と竜人はうまく共存している。竜の分け身として生まれたらしい竜人を憧れの目で見える者は多いが、竜人も普通に人と家庭を持つように、特に昨今はあまり垣根がないそうだ。

どちらかという人の中にも特別な存在がいて、その人々こそがどこか畏敬の念を抱かれている、とウィオラは言った。

生まれた時から、身体はどこかに不思議な刺青のような痣を持っているその人々は、神子みこと呼ばれる存在。

血縁ではなく、いつどのようにして生まれるかはわからないが、人の身でありながら優れた様々な能力を持ち、竜人から見ても驚くような力を使う人々。

精霊に愛され加護を受けているのだとされ、「加護持ち」とも言われているそうだ。

「精霊…？」

「昨日会ったでしょう。蒼の御方は精霊の長です。あの方とは違って、精霊は使徒以外の人の目には見えませんが、この世界のマナを循環させる役割を持っています。魔法の行使には精霊の許可がいりますから、加護持ちもその気になれば魔法を使えます」

魔力持ちは人間の中でも魔法を使える珍しい存在、加護持ちは更にそれがグレードアップした感じかな？ と千希は脳内メモを取って行く。

魔法を使うには少なくとも二種類のマナが必要で、更に、通常は精霊に魔法を使ってもいいですか、といった主旨の誓約言——所謂呪文というヤツを唱えなければならない。

魔法にも制限があつて、自分の魔力が尽きれば使えなくなるし、魔力を使いすぎると死んでしまうそうだ。

ウィオラのように、司祭の中でも特別な「女神の使徒」とは、神の意思を時に伝え聞く者として、精霊に特別なフリーパスを頂いているために無詠唱で魔法を使えるらしい。ちなみに、女神の使徒は各国に一人しかない。

この世界にはマナという物質があり、それは生物にとって欠かせな

いもの。

マナを生み出すのは竜樹で、竜樹にはマナの結晶であり精霊の長である聖なる魂が宿っていて、その部下的な精霊達はマナの運搬などを行っていて、時折人間の中に、精霊に愛された特別な存在がいて……。

駄目だ、覚えることがありすぎて思考がぐるぐるしてきた。

千希が目回しかけていた所で、シュリユセルの昼食の時間が来た。食事を摂ったら今日は別なことを行うという。授業も一旦中断された。

朝言ってた何かの練習か、と思いながら、シュリユセルは本当に何故、あんなにも上機嫌なのだろうと考えた。

正式な王になれたからかと思っていたが、どうも何か別の原因がありそうだ。

そして昼食後、千希はその理由を十二分に体感することになるのだった。

少しばかり、朝の約束を後悔する羽目になるということを、シュリユセルを見て、微笑ましく癒しだなあと思っていた彼女は知らなかった。

竜と魔法（2）

『ひいやあああああつ！！』

佐藤千希は、おそらく人生で一番の絶叫を上げていた。
魔法以外の脅威は無いだろうと高を括っていたのは間違いだったと
猛省する。

かと言つて、今更過去の自分に戻れやしないし、約束も無かったこ
とにはできない。

あの約束の前に戻ったとしても、彼女には、あれほど可愛らしい子
どものお願いを断られる自信は微塵も無かった。

しかしとて、いくら肉体的な危険は無くても、ある意味一番の精神
的苦痛に遭わされるとは予想もしていなかったのだ。

——時は少し遡り。

お昼を終えたシュリユセルに手を引かれ、どこに行くかと思えば、
異様な程に広い中庭に出た。

人払いを済ませてあるようで、いつもはどこにいてもちらほら見え
る城の働き手達は一人もいない。

低い木々や芝生、小さな池まである綺麗なそこは、所々に花が植え
られており、巨大な公園のようにも見える。日向ぼっこに丁度よさ
そうだなと千希は思っていたのだが。

丁度庭の真ん中辺りに立つと、シュリユセルは徐に千希の右手を両手で握りしめて、目を閉じた。
ぎゅゅと握りしめられた手に、真剣そうなシュリユセルの表情。一体どうしたのかと怪訝に思っていた所、いきなり——眩い青銀の光が目には直撃した。

『うつ……！』

何だか目が痛い気がする。多分気のせいだけれど、とにかく眩しかった。

慌てて背けた目を戻した頃には、光は納まっていたけれど、手に触れていたシュリユセルがいない。

「カズキ！ カズキ！」

興奮したような嬉しげな声。

いつもより若干エコーが掛かって聞こえるその子どもの声に、はてと首を巡らせて——千希は目を見張った。

そこには、ファンタジーで定番と言える西洋竜、ドラゴンが一匹、長い尾を揺らしながら佇んでいたのだ。

輝く青銀の鱗に覆われた優美な体躯、背中の被膜は透明な青。柔らかい紫の瞳は瞳孔が縦だか、あまり恐ろしくは感じなかった。

大きさは、大型犬よりもやや大きく、馬と同じくらい少し小さい程度。

見惚れる程に綺麗ではあったけれど、その竜は尻尾をゆらゆら、翼をばたばた動かして、目をきらきらと輝かせていた。

……まるで、やんちゃな子犬のように。

「どうだ？ ぼくはかつこいいか！？」

『……シュリユセル……？』

一人称がまた「僕」になってますよ、なんて軽口も叩けない。ぽかんと見ている彼女の呟きに、青銀の竜はこくこくと首を縦に振った。

『うん… かつこいいよ…』

見た目は、とも言えずにそれだけ口にする、シュリユセルは余計に喜んで、ぱたぱた翼を動かしていた。それによって、局地的に強いそよ風のようなものが生まれる。

「おめでとうございますシュリユセル様。ご立派です。——ですが、少し落ち着いてください。あまり翼を動かされますと花が散って、庭師が怒ります」

エクエスが風で乱れた髪を退けながら言った。

あ、そうか、としゅんとしたシュリユセルは、尻尾や翼を動かすのをやめる。

「他国の竜王にも劣らぬ程の美しさに感服致しました。きっと上手にできますよ」

「そうか？ うん、エクエスがいうならまちがいないな！ がんばるぞ！」

主人に深々と頭を下げるエクエスの言葉に、シュリユセルは何かとてもやる気が漲ったようだった。

外見はとても格好の良い竜なのに、動作などがいちいち可愛くて、ああシュリユセルだなあなんて納得してしまう。

突然人の姿ではなくなったことには驚いたけれど、元々竜だと言われていたから新鮮な感じがするだけだ。怖いとは全く思わない。

お伽噺や二次元の世界でしか知らない本物の竜が目の前にいる。
そのことにいたく感動してはいるのだけれど、緊張感はあるでなかつた。

ふと、竜体のシュリユセルの喉元で、何かがきらりと光った。

光を反射したそれは、あの菱形の石。

あの辺りは竜の逆鱗とか言われる位置ではなかっただろうか。そこに、『審判の石』と呼ばれていたものが同化している。

洋服が破れたわけでもないのに、竜になる時は装具品もそのまま体の一部になるようだ。別に、体に洋服の模様や色などは全く見えなけれど。

あの『審判の石』とは、竜王になる竜が生まれた時、竜樹が生み出すものらしい。その竜に最も相応しい色を纏って出来るその石は、マナが固まって出来るそうである。

片割れである巫女にだけ反応を示す、不思議な石。
シュリユセルが頭をこちらに向けると、石が淡く光った。

「さあ、カズキ、れんしゅうしよう!」

……………何を?

何だか嫌な予感がする、と思っていたら、近づいてきたシュリユセルが屈み、長い首を使って、器用に千希の体をその背中に乗せた。

『……………え?』

強烈な浮遊感。

思わず悲鳴が喉から迸った。

『うひゃあああああ!』

確かに幽霊になりました。ぷかぷか浮いているように移動するのにも、壁を突き抜けるのにも大分慣れました。

けれど、空を飛びたいと思ったことはないのです。

何故ならば私は、飛行機が大の苦手で建物の屋上も苦手。

高所恐怖症なのですから――。

ベランダなどは下さえ見たり身を乗り出さなければ平気なのに。

あんまり高い所は駄目で、飛行機のあの浮遊感が受け付けない感じだったわけで。

肉体があってもなくても、怖いものは怖い。

精神が昇天するかと思っただけ。その体験は数時間に及び、ごめんねごめんねと謝って、物凄く寂しそうな顔をしたシュリユセルに胸は痛んだけれど、それ以降は御断りすることにした。

王の印を得てはじめて、竜は自分の意思で竜体になることができるらしく、その日は初めてのシュリユセルの竜化、飛行だったそうだが、雛が飛ぶ練習をするのと同じで練習が必要だから、千希に付き合っ
てほしかったらしいのだが、そればかりは無理だった。

彼女はその経験を経て、お願いの中身はよく聞いて頷かなければと学んだのだった。

竜と魔法（3）

「…ああ、そう言えばまだ教えていませんでしたか。竜は王になると飛行の練習をしますが、それは新しい王の御披露目として、民の前で飛んで見せなければいけないからなのです。勿論、背中に巫女を乗せて」

……なんですと？

啞然、茫然。

ウィオラの言ったことで完全に硬直してしまった千希は、暫くそのまま微動だにせず、雷撃を二発ほど喰らってようやく我に返ったとか。……初めての連続攻撃に、悶絶したとも言っが。

「……………」

「カズキ、たかいところはにがてなのか？ すまない、しきたりだから、せなかにのつてもらわなければならんだ」

大人の竜であれば遙かに大きいから、本当ならば巫女も安定に欠けて不安になることもないのだろうが、自分はまだ小さいからとシユ

リュセルが謝ってきたが、問題はそういうことじゃないのである。せつかく、一度は断つたのに。

しかし、千希は『王の巫女^{ウィータ}』だ。その役目を放棄することなど今更できるはずもない。

シュリュセルが初の飛行に臨んでから、二日。

幼竜は既に、完璧に飛ぶことができるようになったらしい。流石というか、何というか。

目の前の竜があの子ともだと考えると、自分が背中に乗るというのは若干問題があるような気がしないでもないが、そこはそれ。竜体と人形は違うということだ。

シュリュセルの飛び方には問題ないが、巫女がその背に乗る練習をしないのは問題だそうだ。

本番で無様な姿は見せられない、ということだろう。

そんなこんなで二度目の、乗馬ならぬ乗竜。

……千希の絶叫が暫く中庭に響いたのは言うまでもない。

「……肉体が無いのに、高所が怖いのか」

『……たぶん、理屈じゃないんだと思います』

ぐったりと地面に寝転がる——正確に言えば若干浮いている——半透明な少女を見て、騎士が眉を顰めると、力ない答えが返された。そもそもは翼を持たない人や動物があまりに高い所を怖がる傾向にあるのは、落ちれば危険だと本能的に分かっているからだろう。もはや肉体のない千希だから、何故怖いのかとエクエスは不思議になったようだ。

だらしないと思っっているのがよくわかる。

怖いものは怖いのだ、仕方ない。

しかし、よくよく考えて見ると、あれ？　と思うことがあった。

そう言えば、シュリュセルに触れていなければ露台から真下を見下ろしても、これ程は怖くない気がする。

良くも悪くも、シュリユセルに触っていると生前のような感覚がするのだろう。

今現在、千希は休憩中だった。

かわりに、中庭の中央では、未だ竜体のシュリユセルがウィオラと一緒にいた。

ウィオラが何事か言ったことに応えるようにして、シュリユセルの前に何か水の膜のようなものがいくつか、ぷかぷかと浮いていた。あれもウィオラの魔法かと思いきや、シュリユセルが出しているものだそう^{ひとがた}だ。

ずっと人形^{ひとがた}でいた分、竜になると魔法の使い方もどこか勝手が違うようで、ウィオラに指示を出してもらいながら、練習しているのだ。

大小様々な水の膜が、太陽に照らされて青く光る。

さすがに竜、しかもその頂点の一人であるために、幼くてもシュリユセルの魔力は桁外れなのだと聞いている。

大きすぎる力は繊細なコントロールが難しい。けれど、巫女がいると大分制御が効きやすいのだと。

特に何もしてあげられていないけれど、少しでも役に立てているのなら嬉しいと思う。

シュリユセルが操る魔法の水球は、列を為したり四方に散つたりと様々な動きを見せた。シャボン玉が美しく乱舞しているみたいだった。

そして最後には、一つの形を作る。

「カズキ、どうだ？ これは何の形に見えるかわかるか？」

見立て遊びの一部と考えれば、年相応に可愛らしいのだけれど……それは、あまりに細かな部分までよくできていた。

『……私……？』

声が変になりかけた。

そうそう、とどこことなく嬉しげな竜は可愛いけど。

水の塊で出来た、等身大の自分は、すごくよく似ていて、似すぎていて、逆に気持ち悪かった。

『うん、上手だよ、上手だけど……出来れば他のものにして下さい』

そんなにリアルなもの作られると引きます。だって怖いじゃない。ドッペルゲンガー、とぼそりと呟いて、がっくりと千希は肩を落とした。

夢が見れなくてよかった、絶対に出てくる。ホラー的な意味で。

水で出来た彼女を模したものは、さすがに難しかったのか眼球部分が空洞だったのだ。

せめて笑ってる顔とか……少しばかり、美人に作ってほしかった。

欠けていく月を見ながら、また、彼女の側にはあの小さな獣がいた。

『それで、王の背には慣れたかの？』

『……ええ、少しは……』

『王は魔力をその身に巡らせて結界を張ることができる。魔法や物理的に身を護る効果があるから、カズキもその守護を受けているはずさ。落下する危険はないから安心しなさい』

『はあ……』

落ちないとわかっていても怖いです。

シュリユセルはこちらにかなり気を遣ってくれていて、飛行といっても一定の速度で滑空するような飛び方なのに、どうも慣れない。精神を擦り減らすような飛行練習の後、同時進行でウィオラの授業も続いているので、なかなかきつかった。

『使徒殿の魔法が堪えるのかね？　しかしあれは、カズキが存在するためにも必要なことであつたからの、あまり恨むでないよ』

『……………え？』

何でも、マナがなくては存在できないのは、この世界における全てのものに適用されるそうで、あの雷撃にはマナを千希に与えるという役目もあるらしい。

この世界の人々は世界に溢れるマナを生まれ持っていたり、無意識に取り入れることができるそうだけれど、確かに、千希はこの世界に属していたものではないし、正規の異世界トリップを果たしていないので、体質変化を果たしていないために、そのままではマナが付与されない。

マナを千希に与えるのにどうしたら効率が良いかとウィオラが考えた上での行為だったそうだが……。

『他にやり方ありそうですけどね……』

『一番手っ取り早かったというのものもあるだろうな』

ちなみに、今はもう、ウィオラの魔法によるマナの供給は必要ないそうだ。

聖印を得たことで、そこから千希はマナを受け取れるようになってる。

儀式の前に魂だけの自分が消滅するのを防いでくれたことには感謝するけれど、はじめから、半分は間違いなくお仕置きの手段として

良いと思ったのだろうと千希は考えた。

何しろ、今でも雷撃は続いているし、どう見ても……ウイオラはサ
デスティックな所があった。聖職者なのに。

こうして、昼はウイオラに、夜は獣に様々なことを教わり、少しずつ
知識を蓄えていく千希のため息の日々は、まだまだ続くのだった。

第七話 華やかな虚飾

「私^{わたくし}、貴女のようなひとは嫌いです」

胸を張って言いさられた。

最早、清々しさを感じる程にきつぱりと。

これ程大胆に、嫌いだと言われたのは初めてだった。

……思わず、ぽかんと口を開けて見蕩れてしまった。その、あまりに堂々としている様に。

儀式から七日——つまり一週間後の夜、シュリユセルの白亜の城、フォンスウエル城では、盛大な祝宴が催された。

例え十年の間、儀式をしていないだけでほぼ皆が王だと認めていたようなシュリユセルであつても、正式に戴冠したとあつては宴が開かれないはずがない。

王への負担を考えて、儀式当日から数日間を空けて宴会を開くように決められているために、当日に比べると人々の興奮は大分鎮まつただろうが、その日は諸侯達も、身支度や王への祝いの品選びに、かなり入念な準備を行ってきたようだった。

絢爛豪華な調度品、人々。中世ヨーロッパの舞踏会とはこんな感じだろうか、と千希は思わず辺りをきよろきよろ見回しかけたが、背

後からの——二人の人物の——只ならぬ圧力を感じてぐつと堪えた。なるべく優雅に見えるように床を進んでいく。様々な思惑を含んだ視線や囁き声は意識からシャットダウンすることにした。

天上に浮かぶ明りは魔法によるものなのだという。いくつかの光源が、電球などとは違う優しい温もりの光を散らしている。

夜だというのに、室内は柔らかな疑似太陽のような光に包まれ、とても明るかった。眩しくは感じないその光は程良い明るさで、是非とも地球にあればいいのと思う。

その光に輝きを増す、人々の宝飾品の数々。彼らの纏う衣装はそれぞれ違っていて、たくさんの色彩がそこにはあった。

煌びやかでお伽噺の中に迷い込んだかのような美しさ。——見た目だけは。

王城の中には当然ながら大広間というものが存在する。壁際には休憩用の椅子が並べられ、ダンスの為に開けられた中央の空間以外の場所には、豪華な料理が載せられているテーブルが等間隔に鎮座していた。

着飾った貴婦人達は、多忙な王が開くのは珍しい社交の場においてお喋りを交わす。幾重もの布に包んだような言い回しで、誰かを貶すような噂話を。

紳士達は商談や国の政についての語らいをしながら、互いの腹を探り合う。此度の件、皆はどう考えているのかと。

いずれにせよ、皆が新しい『王の巫女』^{ウィータ}に関する話をこそそこそと行っているのは明白だった。

やや渋い顔をしているシュリユセルに、気にしないでいいのにと千希は肩を竦める。

シュリユセルと千希は、儀式の時の服を少々アレンジしたような服装だった。

さすがにあの服は儀式専用らしく、しかしせっかくの祝宴なのでと、

デザインを少々変えて、やや華美に仕立てたものになっている。

普段着ている服はそうでもないのだろうが、儀式の巫女服とこの服で、一体どれ程の価値があるのかと考えると恐ろしくなる。

新たな王と巫女が大広間に足を踏み入れた時、大きなざわめきが起こり、次いでたくさんの人々がシュリユセルに祝いの言葉を投げかけ、話しかけてきた。

淡々と答えながら自然とそれらを振り切る幼子の姿は、いつもの無邪気で愛らしい様とは違って、年に似合わぬ、どこか冷淡な様子を伺わせた。

それを不思議そうに見る千希に対しては、こつそりと小さな笑みが返される。

その時の彼女は知らなかった。シュリユセルが真に信頼を置くことのできる相手は少なく、いくら幼くても王という立場の彼は、公の場では子どもとして振る舞うことが許されないのだと。

知らぬが故に、ただ一人、きょとんとしていたのだ。

また王様オーラ出てるよ、なんて暢気に思いながら。

内心うんざりしながら、エクエスはいつも通りの無表情を貫きつつ、シュリユセルの側に控えていた。

こうした有力者達の公の場は好きではない。

彼の主人は色々と気を遣って疲れてしまっし、誰かが媚びてくるのも、笑顔の裏に嘲りを浮かべているのを感じるのも煩わしい。

いつものように、一国の王として凜とした態度を崩さぬシュリユセルに敬服しながら——同時に、彼は訝しんでいた。

あの半透明な巫女は、何故あもへらへらとしていられるのか、と常以上に覇気はないが、大半の者達が声を掛けてくるのに対し、少女はへらつと笑って相手をしている。

明らかに下心を持った挨拶と、その裏に嫌悪や見下しが透けて見える相手ばかりだというのに、恐らくそれがわかっていて何故、彼女

はそういった者達の相手ができるのだろう。

泣いて逃げ出すとは思っていなかったが、予想外の対応だったかもしれない。

ある意味、こういった社交の場では正しい対応だ。

視線を移せば、言葉少なに人々に応じているウィオラがいた。

目で問い掛けるようにすれば、僅かに首が横に振られる。

彼女は何かを知っているのだと、それだけで知れた。

今は何も聞くまいと思うが、いつもはシュリユセルに対して満面の笑顔を見せている少女が、ああして他人の言葉を受け流している姿を見るのは、何だか落ち着かない気がした。

シュリユセルが蟻のように集ってくる人々に少々疲れを見せた時だった。

「——失礼、皆様。身内だけでお話がありますの、少々王のお時間をお借り致しますわ」

鈴の音が転がるような声音だ、と旅の吟遊詩人が称したという人物の声が、その場を支配した。

人波を割るようにして、一人の人物が姿を現す。

「……メリア」

「お久しぶりです、シュリユセル様。此度の王位継承の儀が恙無くお済みになりましたことを心からお祝い申し上げますわ。——ここでは何ですので、場所を移しましょうか」

妙齡の女性だった。しっとりとした色香を持った、美しい大人の女性。

二、三十代程だろうかと思われるその人は、シュリユセルに頭を下げて挨拶をすると、こっそりと最後の台詞を囁いた。

頷いた彼を優しい眼差しで見遣ると、あれよあれよという間に、そ

の場から連れて行ってしまう。——千希も一緒に。

あれ？ と千希が思った時には、大広間とは別の部屋にいた。
彼女の右手はシュリユセルに掴まれている。

大勢の人がいなくなつて少しは人心地ついたが、目の前の美人さんは誰なのか。

改めて、優雅に貴婦人が礼を取った。

「お初にお目にかかりますわ、新たな『王の巫女^{ウィータ}』様。私はメルリーリア・コラルリウムと申します」

『あ、はじめまして…』

まさに佇まいからして完璧だった。

見事な銀の髪に銀の瞳、整った顔に浮かぶのは慈愛に満ちた笑顔。
聖母と言われてもおかしくはない美女だ、と千希はただ見惚れる。

「カズキ、メリアはわたしのおばにあたるんだ」

何と彼女はシュリユセルの父親の妹なのだという。

「とうの昔に降嫁しておりますけど、今でも陛下とは親しくさせて
頂いておりますわ」

「……メリアまで、へいかとよばなくてもいいだろう」

「あら、ご不満ですか？ それは失礼致しました」

くすくすと微笑むメルリーリアに対し、先程までの能面のような表情から一変して子どもらしく不貞腐れるシュリユセル。

それだけで、彼が信頼している相手なのだと見てとれた。

と、そこへ、思い出したようにメルリーリアが後ろを振り返る。

「ミリア、ご挨拶がまだじゃなくって？」

シュリユセルの叔母という美しい女性の登場に目を奪われていて気がつかなかったが、彼女の後ろにはまだ、もう一人誰かがいた。

す、と前に出て、シュリユセルに頭を下げたのは――まさに美少女、という言葉が似合う人物だった。

ゆるくウェーブのかかった金色の髪に、大きな銀色の瞳。薔薇色の頬にすうっと通った鼻筋、小さな可愛らしい桃色の唇――物語のお姫様、と形容するのがまさに相応しい、甘さを残した正統派美少女。どこか勝気な瞳は何故かこちらを不機嫌そうに見ていた。

こんな美少女に気付かなかったなんて自分は馬鹿だろうか、と千希は思った。

「……ご無沙汰してますわ、シュリユセル様。――それと、はじめまして、巫女様。私の名はミリアリーネ・コラルリウムと申します。陛下の従姉にあたりますわ」

それから、同性ながら見惚れるような美貌の、見た目千希と同年代と思われる少女は、真っ直ぐに千希を見据えて言い放った。

「初対面ながら大変無礼を申し上げますけど」

私、^{わたくし}貴女のようなひとは嫌いです、と――。

空気が凍った気がした。

第七話 華やかな虚飾（後書き）

書いてて楽しかったです。

華やかな虚飾（2）

初対面ながらすごい子だ、と呆然とする千希本人ではなく、周りの方が慌てていた。

「ミリアー！」

「お母様、有象無象はどうでもいいのですけれど、可愛い陛下に関わることならば、私は黙ってはいられません」

有象無象とは夜会の貴族達に向けられているようだ。続く言葉は、シュリユセルとどうやら親しいらしいことを伺わせた。後に聞いたことだが、ミリアリーネとシュリユセルは、兄弟のように仲が良く、特にミリアリーネはシュリユセルを目に入れても痛くない程に可愛がっているのだそうだ。

——銀の陰しい眼差しが、千希を射る。

「貴女、何ですか先程のへらへらとした情けない笑い方は！ 仮にも淑女ならば、もっと背筋を張り、毅然とした態度で優雅に微笑みなさい！」

「え…つと…？」

「貴女があまりに隙を見せることは陛下の評価にも繋がりますのよ、それをわかっているのかしら？」

「……あの、」

「聞けば、お忙しい使徒様に教えを乞うているとのことなのに、あの体たらくは何です！ このままでは、陛下にとっても使徒様にとっても、名折れに繋がりがねませんわ！」

流石に付け焼刃の礼儀作法ではお気に召さなかったようである。炎の如く激しい剣幕に、もう声も上げられない。

それから少女は一つ一つ千希の至らぬ点を挙げていき、最後にこのたまった。

「貴女が選ばれたことには貴女自身には何の責任もありません、全ては双女神のご意思です。けれど、選ばれたからには果たさねばならぬ義務が生じます、その責務をきちんと自覚し、礼儀も弁えぬ輩には完璧な作法を以て応じねばなりません。優雅な身のこなしは淑女の鎧、貴女が侮られることは陛下が軽んじられているのだと意識なさい！」

まさに、正論。

生身の人間ではないということと差別の対象になるならば、それ以外のことでは付け入る隙を与えるなど言いたいのだろう。

叩きつけられるかのような言葉の数々に、ぼけっとしていた千希だったが、目線で「返事は！？」と促されていることに気づき、こくこくと首を縦に振った。

『わ、わかりました…』

ふう、と息を吐くと、令嬢はすつと一歩引き、シュリユセルに向けて頭を下げた。

「失礼致しました、陛下。少々熱くなつて礼儀を損ねましたわ」

「い、いや…」

ぱちぱちと目を瞬かせるシュリユセルの斜め後ろで、表情すら変わっていないがエクエスも瞳に驚きの色を浮かべていた。

「ミリア、いくら何でも巫女様がお可哀そうよ。まだ作法のお勉強をなさってから間もないとのことなのに……申し訳ありません、シ

ユリユセル様、巫女様。娘が礼を欠いた行いを致しました」

メルリーリアは困ったように、娘の不作法を謝った。

それに対して、まだびっくりしているらしいシュリユセルはどこか生返事を返したのと反対に、千希はいいえとんでもないと恐縮していた。

「いいえ、お母様。どうやら、この方は淑女たるものそれ位の心がけが必要だということを理解していらっしゃらないようでしたわ。夜会の場でやる気の無さがにじみ出ておりました。抜けた方々は気付かないかもしれませんが、分かる者にはわかります——いくらやる気が無かるうとも、それを露にしていけません！ わかりましたか！」

『はいっ！』

ぴん、と背筋を伸ばして元気よく返事をした。

気分は「はい！ お嬢様！」と言いたところだが、また怒られそうなので胸の内に留めておく。それ位の良識はあった。

最初こそ緊張していたが、いつぞや味わったことのある人間関係の嫌な部分の縮図をあの夜会の場に見て、何だ貴族ってこんなものかと途中からやる気をなくしていたことに当然気づかれていたらしい。すみません、精進します。

「……ご自分の立場をしっかり理解なさい。貴女がいつまでも見苦しい状態でしたら、再びご忠告させて頂きますわ」

つまり、さつさと自分の置かれた状況をきっちり把握して、せめて作法だけでも文句のつけようがないようにしないとまた喝入れるぞ、ということですね。わかりました。

メルリーリアさんは公爵家に嫁いだ為、ミリアリーネ嬢は公爵令嬢

だそうです。

血筋からするとお姫様でもあるわけです。

佐藤千希は感激致しました。物語に出てくるようなお姫様が本当にいるのだと。

可憐でか弱い女の子も好きですが、気の強い、護られているだけではないお姫様はもっと好きです。

一方的に責められているにも関わらず、妙に熱い眼差しを送ってくる半透明な巫女が理解できず、令嬢は思わずたじろいだが、憧憬の目を向けていた千希はそのことに気付かなかった。

彼女は年頃の女の子の例に違わず、可愛いもの、綺麗なものが好きである。ただ少し、嗜好が大衆とは異なる点があるが。

今のところ一番のお気に入りにはシュリユセルとミリアリーネになったようだ。

その後、シュリユセルがミリアリーネに近づいて、こう言ったことで、彼女達には奇妙な間柄が出来上がることになる。

「ミリア、カズキはいろいろとふなねなことがおおいんだ、できればなかよくしてたすけてやってくれないか」

子犬のような上目遣いをお願いをされた令嬢は、にっこりと微笑んでこう返した。

お任せください、と。

夜会の場に戻った一同は再び貴族達に取り囲まれたが、千希の側にはぴったりとミリアリーネが付いていて、仲良くなりましたと言わんばかりのオーラを振りまいた。

どうやら元王族でもあるメルリーリアと現王の従姉にあたるミリアリーネは、かなりの権力を持っているようで、コラルリウム公爵家

の後ろ盾を得るということは、何かと煩い輩を黙らせるには効果的であったのだった。

そうして千希には、こちらに来て初の友人——と呼べるのかどうか今一わからない——らしき相手が出る。

貴女の為ではなく、シュリユセル様の為ですからね、勘違いしないでくださいませ、何てツンデレっぽいことを言いながら、二人目の礼儀作法の先生と化した少女は、ウィオラと共に仲良く千希を扱くようになるのだった。

ちなみに、シュリユセルが夜会の場合を少し外していた間、そこを取り持っていた者の一人はウィオラで、ミリアリーネから事情を聞いて快く千希の改善計画に了承した。夜会で不満が溜まったのか、いつも以上にお仕置きの時にどこか生き生きした様子だったことは、軽く千希のトラウマになりかけた。

思えば竜の一族なのでメルリーリアも外見はとても若々しく、とても子どもを持つ母には見えなかったが、見た目千希と同じくらいでも、ミリアリーネも年齢的には……？　と思っただが、ウィオラの時のように愚行を犯すことはしなかった。

実際は、本人があっさりと五十二歳だと年齢を口にして、母は竜族でも父は竜人、お陰で妙な年の取り方をしているが、人で言うところだ十四歳程だ、と説明された。

竜人のように少年期に入るまでは人と同じように年を取り、その後は竜のように十年に一度年を取っているという。

竜族の女性は百を超えるまで年は答えるが、それ以上になると時に失礼にあたるのでこちらから年を尋ねないようにするのがマナーらしい。

とりあえず、女性は若く見えても年を聞くなど。しっかりと心に刻みました。

……すっかり忘れていたけれど、日本人は童顔に見られがちだ。

十七だと言つとひどく驚かれていた。外見の意味の年齢でも年下だと思われていたらしい。……複雑である。

人生初の煌びやかな夜会で、ツンデレ系美少女とお近づきになった夜だった。

華やかな虚飾（2）（後書き）

実はミリアすぐくお気に入り。シンデレお姫様ってよくないですか。

第八話 竜王の巫女（1）

いつにも増して、空は青く澄み渡っていた。

流れる雲は少ないが、年中を通して気候がゆるやかに暖かいこの国では、特に春のこの時期、日差しは柔らかく、吹き抜ける風もどこか温もりを感じた。

昨晩は遅くまで、国の要人達が城で祝宴を開いていたそうだが、城下の人々にはそんなことは関係ない。いつも通りに市場が活気づいているかと思いきや、各店が準備中という札を出し、閉められていた。

がらんとした通りだが、この機を逆手に取って盗人が現れぬようにと、しっかりと警備の騎士達があちらこちらに点在している。

石畳の中央に豊かな水が湛えられた、大きな噴水のある広場。街で一番大きなその広場に、市井の人々は集まっていた。

皆、一心に王城の方を見つめている。

誰もがそわそわと落ち着かない様子でいる中、生粋の商い根性に突き動かされているらしい商人は飲み物などを売り歩いているが、売れ行きはよろしくない。流石に皆それどころではないらしい。

ざわざわとアクアの民達が言葉を交わす中、ふっと、大きな影が空を覆った。

巨大な鳥のような影は、彼らが待ちわびていたもの。陽光の光に、青銀の鱗がきらりと輝く。

——人々は、歓声を上げた。

「シュリユセル様ー！」

「王位継承おめでとうございますー！」

「ご立派ですー！」

わあつと口々に祝いの言葉が投げ掛けられる。

彼らにとって、竜は憧れの存在だが、まだ幼いシリユセルは、市井の民と様々な交流をしてきたこともあって、根強い人気があった。城の方角から滑空してきた青銀の竜は、彼らの真上から少し離れた位置に來ると、空中でぴたりと制止した。

僅かに下げた首から、その背に乗っている者の姿が見える。

「此度、私は無事に王の座を継承した。此処にいるのが新たな巫^{ウィ}女^{イタ}だ」

どこか威厳のあるその声は、竜から発せられるもの。人の声とはやや異なり、どこか神聖な響きを持った声は、人々を一気に鎮まり返らせた。

「見ての通り、我が巫女は少々風変わりかもしれない。しかし、確かに双女神に認められた『王の巫女^{ウィータ}』だ」

竜王の背に乗っていた人物が、ゆつくりと立ち上がる。その姿は肉体にしては輪郭がやや臃気で、不透明に見える。

その異相に人々は驚いたが、掲げられた手の甲に、見紛うことなき聖なる印を見つけて、ざわめきは消えた。

「この世に遍く全てのもの、万物は女神の子だ。——我が民よ、例え姿形が異なろうと、この者は我が巫女、アクアに恵みをもたらす者である。開かれた心を以て見よ」

輝くような純白の衣の裾を持ち上げ、巫女は優雅に一礼する。

その顔立ちは特筆することなく、平凡という言葉が似合っていたが、一つに結われた黒髪と、その微笑みは、民に親近感を抱かせた。

アクアの住民たちは、基本的に柔軟な思考を持っている者が多い。
女神が認めたならば、あの方が新しい『^{ウィータ}王の巫女』なのだ、と納得するほかなかった。
再び上がる歓声。
どうやら受け入れてもらえたらしいことにほっとした表情を浮かべる黒髪の巫女を乗せた竜は、どこか誇らしげな眼差しで、国民達を見下ろしていた。

——それらの光景を、離れた位置からじっと見つめる一つの影。

「ふうん… やつと代替わりしたのか」

手にしていた熟した果実をしゃり、と口に入れる。
もごもごと咀嚼して、その味に舌鼓を打った。

「さすが水の国。土地も割と豊かだね」

その人物は、明らかに遠すぎて人々など豆粒ぐらいにしか見えないだろうという山の中から、面白そうに口元を歪めて新王のお披露目を見ていたのだ。

「巫女が生身の人間じゃないなんて、女神も何をお考えなのか」

くくつと笑みを零し、果実の芯を茂みに投げ捨てた。
悪戯を思いついた子どものように、その瞳はきらきらと輝く。

「ねえ、会いにいつでもいいよね？」

何もない空中へと呟かれた、その愉しげな声に応えるかのように、
風が舞った。

第八話 竜王の巫女（1）（後書き）

短くてすみません…。

竜王の巫女（2）

——正直言つて、こうもあっさり受け入れられると、逆に焦る。

竜体のシュリユセルの背に乗って、人々の熱狂的な歓迎ムードに、千希は若干引いていた。

明らかに普通の人間と違う相手を何故こうも易々と受け入れられるものなのか。

それが国民性だと言われればそれまでだけれど、先日、貴族達から奇異なモノを見る眼差しを向けられた身としては、素直に納得がいかない。

今朝は、練習の成果を見せる時だときどきしていたが、平素の巫女服を身に纏い、シュリユセルの背に跨った千希は、ウィオラとエクススの両者から、「民があからさまに拒否することはない」とお墨付きを頂いていた。

その理由を深く尋ねる暇は無かったから、ひたすらびりまくりながら、何とかシュリユセルに紹介された時は、猫を十匹ばかり被って表情を固め、スパルタ授業を思い出して礼を取ったのだ。

最初こそ市井の人々は驚きを見せたけれど、王の言葉で割合すんなり納得していた。勿論、中には納得いかず、千希に否定的な感情を覚えた者もいただろう。いて当然だ。しかし、ほとんど忌憚なく彼女を受け入れてくれた人々の方が、圧倒的に多い。

今日は、アクアの王都カエルレウムの大広場で、城下の人々への王と巫女のお披露目だった。流石に王都の全ての人々が集まれるわけではないが、大勢の群衆が広場にこった返していたことには驚いた。城下の人にとっては仕事を公然とサボれる日、らしい。代わりに、城の人々は働き詰めらしいが。

今日から三日間、シュリユセルと千希の民へのお披露目は続く。さすがに国中を回することは出来ないが、アクアの代表的な三つの都市だけは飛んで行こうというわけだ。

竜の飛ぶスピードは、本気を出せば新幹線なんて目じゃないかもしれない。かなり手加減をしてくれて、シュリユセルは千希を乗せている場合はとてもゆっくりと飛んでくれるので、普段は車程度の速さだが。

高所の恐怖と大勢の前という恐怖で、内心あわわわとろたえていた千希だったが、幸い落ちることはなかったのでほっとした。

聞いた通り、シュリユセルは魔法を使つて彼女の周りに結界を張つていてくれたらしい。安全ネット以上に信頼できる。それ以前に、恐らく落ちても地上すれすれでふわふわ漂っているのではないですか、と冷静にウィオラに言われて、あ、そうかもと軽く納得してしまったものだ。

……笑顔の溢れる都。どこの国でも、貧困に喘ぐ民というものは存在するもの。

けれど、アクアでは飢えて亡くなる人が少ない。それだけ国の機関が優秀で、制度が整っているということだが——人々の熱狂的なシュリユセルへの支持が、そのことに絡んで意味することを、千希はまだ知らなかった。

シュリユセル・アクアレギアスは、決して驕らぬ王。『清廉なる青銀』と謳う吟遊詩人がいるように、彼は卑屈でもなく、傲慢でもなかった。

自らの手で出来ることなどたかが知れていると察していた為に、努力を惜しまず、信頼できる側近達を適度に頼った。運が良かったのは、シュリユセルの周りには能力の高い人間が多くいたということだろう。

先代の竜王が崩御して、十年。その間に、もともと悪政を強いられていたわけではないが、どうしても貧富の差が顕著になりすぎて、貧民街が出来てしまっていた社会を、シュリユセルはどうにか改善

しようと奮起した。

異国の革新的な方法があれば参考にし、この国に適用するにはどのように変えていけば受け入れられるかをほぼ不眠不休で臣下達と討論し続け、強靱な肉体を持つ竜でありながら耐えきれず、時には三日程気を失うようにして眠り続けたこともある。

幼い竜の統治を心配していた民も多かったが、シュリユセルの国を想う一途な姿勢とそのひたむきで熱心な取り組み、少しずつ緩やかに安定していく情勢に、人々は新たな王への思慕を高めていったのだ。

国民が気がかりであつたのが、巫女の不在。巫女がいなくては、シュリユセルは正式な王にはなれない。本人がそれを気にしているのがわかっていたから、余計にはらはらしていたのだが、その日初めて見たシュリユセルの立派な竜体と、多少異色ではあっても確かに神に認められた『王の巫女^{ウィータ}』の存在に、ほっと安堵したのだった。それらの事情をまだ知らないから、千希は頭の中を疑問符で一杯にしていた。

「カズキ。みんな、わたしたちをうけいれてくれている。よかったな」

ひっそりと囁かれたシュリユセルの声。その嬉しげな声を聞くと、彼も国民を信頼していることが伝わってきた。

彼が嬉しいのであれば、千希とて今、民の反応にこだわるよりも、その気持ちに素直に賛同してあげたい。

そうだね、と返して、二人で喜びを共有し、暫くの間、王都の人々の歓声に応えていた。スパルタ授業が役に立ったので、その様子は国民からすると、穏やかで優しい巫女さま、に見えたらしい。

ある美少女が言っていそうだ、「ほら、はったりも役に立つでしょう」と。まさに礼儀作法は淑女の鎧だった。

——はじめは、自分が経験したことの無い程に高い場所で、飛行機の内部でもなく外界と接しながら空を飛んでいることに耐えるだけで精一杯で、民の前で挨拶をした時もまた、不安に駆られていて、周囲を見回す余裕などなかった。

ふっと気分が軽くなつた途端——目に飛び込んできたのは、言葉を失う程の自然の美。

確かに、ずっとシュリユセルの背中にしか目を向けていなかったという理由はある。しかし何故、これ程までに鮮やかで美しい風景が目に入っていなかったのかと、自分の頭に問い掛けなくなる位に、アクアという国は美しかった。

映像で見たことがある、地球の欧州の国々に少し似た外観をしているかもしれない。

けれど、建物は少し似た所が合っても、その全容は明らかに違っていた。

あちらこちらに点在する、大小様々な、湖や泉。陽の光を浴びて煌めく水面は、何とも見る者の目を奪い、澄み渡る蒼さを湛え、時には翡翠のように色を変えるものもあった。

それぞれの水源から伸びる枝分かれした水の流れが、白い石畳の広がる王都を中心として、規則的に固まって存在する街や集落へと行き渡り、田畑へも行き渡っていることが見て取れた。

水害に遭えばひとまりもないだろうに、川のような水流の周りに、堤防などが見られないように思う。あれ？ 前に、堤防設備について話していたことがあったように思うけれど——設営が遅れているのだろうか？

そう内心で疑問に感じた所で、想像していた堤防こそないが、代わりに、それらは全て、透明な硝子のようなもので覆われていることに気付いた。実際には硝子ではなく、魔法の応用によるもので、アクアの水流は全て、断面が半円形の筒のように風の膜が覆っており、光の屈折により硝子のように輝いて見えるのだ。以前耳にした堤防

とは、地球で指すようなものとは異なり、その風膜のことを示していたのである。それが全て自然への配慮である、といったこと全てを、千希はまた後に知る。

あちらこちらに在る森は瑞々しい緑を誇り、肥沃な大地を育てている。

一言で表すならば、アクアは自然との共存を選んだ国、だった。

これが自分の相方が愛し、護ろうと努力を続けている国。

シユリユセルの誇り。

これほど美しい土地を、愛せないはずはないと、感嘆の中で思った。地球という世界から弾かれ、異なる世界へ辿り着き、不思議な立場を手にした少女に、第二の故郷と思えるような場所が出来た瞬間だった。

時間に換算すると、民の前にいたのは二時間にも満たない程。

シユリユセルが暇を告げ、優美に滑空して城へ帰ると、そこでは何故か人々が慌ただしそうにしていた。

「……どうした？」

人の姿よりもエネルギーの消費が大きいらしく、それを回復させるために、と用意されていた果物の類を竜体のまま、中庭で頬張るシユリユセル——竜の体でも人形の時と食べるものは同じらしい——は、使用人達の忙しない様子に首を傾げた。

迎えていたエクエスが、甲斐甲斐しくシユリユセルの食事を手伝いながら、嘆息する。

「——隣国から、魔伝がありました」

魔伝、とは電話とも手紙とも言えるもの。

魔法によって大した時間の差もなく届けられる書簡が、紐解けば文を連ねた者の声で話し出すのだ。

一瞬、美味しそうに果物をかじっていたシュリユセルの動きが止まる。

竜が座って前足で食事をしているという何とも言えない光景を、飛行の疲れでぐったりと床に寝そべりつつ、微笑ましそうに見ていた千希は、床から若干浮いたその姿勢のまま、どうしたのだろうと顔を上げた。

「恐らくもうわかりだとは思いますが、イグニスからです。七日後にいらっしゃるそうですよ」

はー、と、いつになく疲れたように息を吐くウィオラが、突然現れてそう言った。

三者三様に、どこかどんよりと憂鬱そうな気配を漂わせている。

『あの…？』

一体どうしたのかと恐る恐る声をかけた千希に、ウィオラが淡々と答えた。

曰く、七日後に、隣国イグニスの王がやってくる、と。

シュリユセルが王位に就いたことに祝辞を述べにくるらしい。

この三人がこれ程までに嫌そうにしているということは、どんな人物が来るのだろうと、千希は冷や汗を掻いたのだった。

竜王の巫女(2) (後書き)

お久しぶりです、すみません。

竜王の巫女（3）

「や、こんばんは」

しゅたつ、と手が挙げられて、にこやかな挨拶を頂く。

『……こん、ばん、は……？』

思わず挨拶を返してしまっただけけど、それでよかったのか。

アクアの中で、王都に次いで大きな街、カリダステラとフリーギダにそれぞれ訪問し、新王と新巫女の着任の挨拶を済ませた夜のこと。王都程ではないがそれなりに友好的に迎え入れられて、ほっと安堵したらしいシュリユセルが、数日後に備えた隣国の王の訪問に関する憂いはひとまず忘れずとして、ぐっすりと眠りについたのを見守り、いつものように細くなつていく月光の下で、あの短剣に宿っているらしい銀色の栗鼠のような生物——世界には魔具と呼ばれる、特殊な魔法の掛かった希少な武具があり、時折あのような不思議な存在が宿っていることがあるのだと最近学んだ——問い詰めた所、ハルとだけ名乗った、老人のような口調の持ち主と語っていた時。唐突に、声を掛けられた。

「君が新しい巫女？」と。

見上げた先、広い露台の手すりの向こうに人影がひとつ、あった。闇夜に映える星を散らしたような白金の髪。愉快そうな色を浮かべ

た紫紺の瞳。整っていないながらもまだまだ未発達な美しさを持つ——
どう見ても、まだ十代に満たぬ程の幼い少年が、まるで地面に足を
つけているかのように自然な動作で、空中に立っていた。
一瞬お仲間かと思ったが、明らかに相手は透けていない。
にこつと可愛らしい笑みを浮かべて、少年は軽い調子でこんばんは、
と暢気に挨拶したのだった。

『えーと……どちらさまでしょう』

不法侵入者はこの城にはこれないはず。ということは、きっと城の
関係者なのだろうけれど、多分面識はない。

こんな夜中に幼い少年が出歩いているのも不思議な話だが、見た目
こそ子どもでも、相手からはどこか大人びた印象を受けた。

「驚いた？ 驚いたなら悪戯成功だね」

ふふふ、と楽しみに笑いながら、てくてくと宙を歩き、手すりに乗
ると、よいしょ、と露台の床に足をつける。

先程の千希の質問を華麗にスルーして、少年はじろじろと彼女を前・
横・後ろと様々な向きから見てきた。

何なんだと呆気にと取られている間に、再び向き合う位置に来て、彼
は愛らしい仕草でこてんと首を傾げる。

「んー…マナの質が少し違う。界迷者か。王の巫女ウィータが異界の民とは
初めてのことだね」

『え、わ、わかるんですか…』

「そりゃあ、僕は理ことわりの探究者の一人だし…」

『——どこをほつつき歩いとした、オルサファイーニス』

少年へ、やれやれと言いたげな声が掛けられた。先刻から何も口に

しなかったハルだ。

「あれ、ハル爺。めっずらしいなー、なんでこの子のところにいるの？ エスは？」

『付き人のような者として貸し出されとるのだよ』

「えー！？ あのエスが！ 本当に！？」

驚愕、といった表情を浮かべた少年は、千希に視線を向ける。
がしつと肩を掴まれ、揺さぶられた。

「君、よっぱど気に入られたんだね！ あの子がハル爺を人に預けるなんて！」

『は、え…！？』

ぶんぶんぶん、といつぞや自分がシュリユセルにしたような行為をされ、目を白黒させ——千希は、いくつかの不可解な点を見つけた。この会話の流れから、彼が指す「エス」という人物は一人しかいない。

その人は罷り間違つても、幼い少年に愛称で呼ばれたり、自分のことを気に入っていたり、「あの子」なんて子どものように言われるようなひとではない。

それに、突然のことに驚いてつい、相手を止めようとした千希の手は、当然のように小さな腕を擦り抜けた。

——何故、このひとは私に触れられる。

「ああ、ごめんね。つい興奮しちゃった」

悪びれない笑みを浮かべて、手が離れていく。

「はじめまして、シュリユセル王の巫女様。僕の名前は、オルサフ
イーニス・グラナトス」

気付くのが遅れたが、少年は、その身に白い衣を纏わせていた。

どこかで目にしたような、と記憶をさらえば、すぐに似たような衣服が思い浮かぶ。美貌の師匠がいつも着ている司祭服を更に簡素にして、男性用にしたようなそれだ。

しかもその名前は聞き覚えがある。

優雅に衣を翻し挨拶をした後、愉快そうに彼は言った。

「オルって呼んでね。あ、こんな見た目だけど、一応ウィオラとエ
クエスの父親でーす」

千希は絶叫した。

その声に驚いて、エクエスが飛んできて、シュリユセルが目を擦りながら起きた挙句、どこからかウィオラもやってきた。

暫くその場が固まったことは、言うまでもない。

竜王の巫女(3)(後書き)

短くてごめんなさい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2645j/>

月の調べと竜の巫女

2011年10月9日21時37分発行